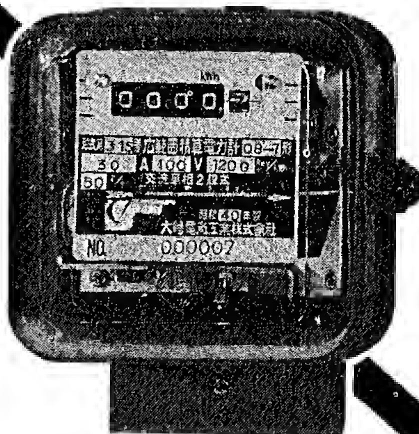
Osaki

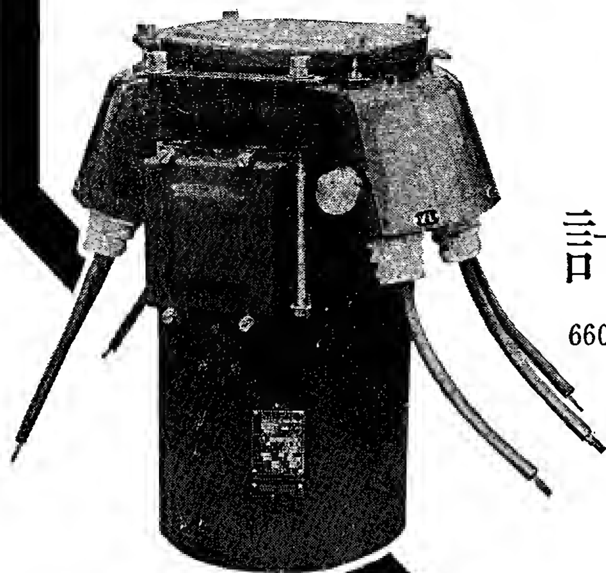
最高の確度と信頼度を持つ

電力量計

単相用	OB－7形
3相用	OW－7形
精密用	OP－3形



OB－7形広範囲単相積算電力計



計器用変成器

6600V用重予型PCT　PDN形

主要製品

電力量計・電流制限器
計器用変成器・電圧調整器
配電盤・分電盤・制御盤



大崎電氣工業株式會社

本社・五反田工場　東京都品川区東五反田2-2-7　電話東京（443）7171代表
蒲田工場　東京都大田区多摩川2－8－1　電話東京（732）6511代表
埼玉工場　埼玉県入間郡三芳村大字藤久保　電話 0492－61－1205

ハンドボール「第59号目次」

昭和43年11月号

表紙写真　第23回国体一般女子決勝

光島磯雄氏撮影

キヤノンペリックス200㎜ 3.5

5.6/1000　Tri X

（10月5日高浜小学校）

傾聴すべき二つの"忠告"

～ミュンヘンへの戦いは始っている～

『来年あたりかなりの実績をあげておかないとJOCは派遣してくれないとみる』

『世界のトップレベルに達するには努力がいる』

——この二つの言葉は前号の本誌に掲げられたもので前者は保坂周助会長代行の巻頭言、後者はN・ネデフ氏の談話のそれぞれ一節である。私はこの二つの言葉は、今の日本ハンドボール界に大きな警鐘だと思う。

今や日本ハンドボール関係者の心は「ミュンヘン、ミュンヘン」と高鳴っている。

しかし、掛け声ばかりで、実績的には、ほとんどミュンヘンへの準備がなされていないが現状である。

メキシコオリンピックが終ったばかりだ、焦りなさるナということなのかも知れないが、日本のスポーツ界における"ハンドボールの位置"は残念ながら強大ではない。ましてや、オリンピックということになれば、過去の実績は一つもなく、他競技に比べてはるかに大きなハンディを背負っている。

メキシコ大会を前に、JOC（日本オリンピック委員会）が少数精鋭主義を打ちだし、各競技団体が争って、そのワクをいかに多く得ようとしたかは、御存知の読者も多いハズである。

今回の場合は、東京大会の次ということあって最終的には二百人をこすデレゲーションがメキシコ・シティに乗りこんだが、ミュンヘンの時にも、このような大規模な代表団を送るかどうかは一つの保証もない。むしろ縮少されとみるのが常識だろう。

その場合"初顔"のハンドボールの立ち場は決して楽観を許さない。

日本のハンドボール界が目指すのは一九七二年のミュンヘン大会ではなく、それ以前——つまり一九七一年であり、一九七〇年であり、来年における"国際的な実績"なのである。

保坂会長代行は日本体育協会理事でもあり、前掲の発言は、日本ハンドボール界をおもう重大な忠告であると同時に警告でもあるのだ。

一方、ネデフ氏はつぶさにヨーロッパ各国の近況・情勢を見ている人で、各国と日本を比較した場合の卒直な感想があのような助言になっているのである。

残された期間は"4年間"ではない。"あと僅か"なのである。

ようやく選手強化対策指導本部が発足したようだが、オリンピックへ突進するには、さらにこのスタッフを煮つめて、遅くとも今年内には『向こう4年間の強化計画』を立案し、発表までにこぎつけるべきであろう。

荒川体制が布かれて1年7ケ月地道な発展、充実はとげているものの、今のペースはこの期において、ふさわしい早さとはいえない。

日本ハンドボール界の命運をかけるといってもよいミュンヘンオリンピックへの戦いの幕はすでにあがっているのだ。

日本ハンドボール界の首脳陣、執行陣、指導陣が一丸となってたくましい前進を示すようその行動力、活動力を大いに期待するものである

（S・S）

女子球界は熊本が征す

一般女子大洋デパート・高校女子菊池農

一般男子は大崎・教員は大阪イーグルス・高校男子は全静岡

第二三回国民体育大会秋季大会ハンドボール競技は10月2日～6日までの5日間福井県高浜町、高浜小学校グランド、青郷小学校体育舘（雨天）、高浜町体育舘（雨天）で行なわれた。

一般男子は大崎電気（埼玉）と三景（東京）が危げなく駒を進めて、決勝戦は接戦であったが、大崎電気が八連覇を果した。

一般女子は今年度初の真の意味での四強の対戦となったが、大洋デパートと田村紡が決勝戦で顔を合せ、大洋デパートが全日本の主体となっていた田村紡を破り、夏の全日本総合に続いて二冠を獲得し、五年ぶり、三度目の優勝を飾った。

教員男子は予想通り、大阪イーグルス、埼玉教員団という宿敵同志の対決となったが、大阪イーグスが夏の教職員選手権の雪じよくをとげた。

高校男子はインター・ハイ優勝の下関中央工が準々決勝で新居浜工に破れるなど波乱が続いたが、結局決勝は全静岡—兵庫選抜の選抜チーム同志の組み合せになり、全静岡が優勝をとげ、国体高校部門に新しい話題をよんだ。

高校女子はインター・ハイ優勝の菊池農が他を全くよせつけない圧倒的な攻守を見せ、実力のほどを見せた。この部門でも選抜勢の成績が良く、来年度からの国体高校部門の編成にいろいろな問題を投げかけることになろう。

順当な結果におわる

一般男子

▽一回戦

熊本ク（熊本） 27（14—3 13—11）14 大曲ク（秋田）

前半の熊本はミドルシュート、ポストプレーをよく決めて、大量リードを奪った。

しかし、後半に入ると大曲クは良くカットプレーに出、反撃をしたが、前半の差をついにつめることができず、熊本クが快勝した一戦であった。

両チームともに動きは多かったが、ミスが多く、平時の練習不足と基礎技術の未熟さが目だった。

AOK栃木（栃木） 22（13—9 9—5）14 宗形製作所（大阪）

前半は栃木のペースで試合が進んだ。これは速攻を中心にしたもので、楽に点差を開き、ゲームをきわめて有利に展開していった。

後半に入ると、逆に宗形の速攻が良く決り、追い上げをはかり、一時は一点差にまでつめ、ゲームを盛りあげたが、最後までは、スタミナが続かず、差をあけられる結果となり、惜しくもAOKに勝をゆずった。

徳山ク（山口） 18（11—3 7—8）11 県工ク（石川）

徳山クは前半、安沢を中心にした攻撃で大差をつけた。後半県工クの逆襲が見られたが、前半の失点は余りにも大きすぎたため、ついに追いきれなかった。県工クの最後まで試合を捨てない斗いぶりは好感がもたれた。

両チーム共ゴール前のコンビがとれていず、個人の単独フエイントからのシュートが多く、走りの少ないゲームであった。この点を更に補い、好チームに成長してほしい。

北電福井（福井） 25（12—1 13—5）6 青森マツダ（青森）

地元の声援を受けた北陸電力は前半から多いにとばし、小笠原を中心にした攻撃で12点をあげ、青森を僅か1点に押えこんだ。

後半に入っても、このペースは変らず、ときおり見せる青森の反撃を5点に押さえ、自らは13点の大量点をあげ、地元の声援に見事に応えた。体力、技術、斗志いずれをとっても、北陸電力の快勝であった。この試合は12点の大量点をたたきだした小笠原の健斗は賞されよう。

光電工業（群馬） 21（7—9 14—8）17 海上自衛隊第一航空群（鹿児島）

前半は海上自航のペースであった。しかし、技術的に一日の長のある光電工業は前半の2点差を後半はじめに逆転すると、速攻の成功による加点が増え、試合の展開を楽にしていった。

富岡高OBを主体としている光電工業は技術一般—特にシュート力—において、海上自航に一段と優っており、二回戦に駒を進めることができた。

全静岡 22（10—5 12—10）15 富士レジン（兵庫）

清水商業OBが中心の全静岡はチームワーク良く、前半に五点差をつけ、後半も自巳のペースを守り、快勝した。

静岡はポストプレー、ロングシュートをおりまぜた攻撃を成功させていたが、兵庫はパス、シュートとも思うようにいかず、実力を発揮することなく、敗れさつてしまった。

静岡は若手の清商OBの活躍がめだった。

住化菊本（愛媛）31（16―9／15―9）18 北農ク（長野）

実業団の一方の雄住化菊本と北佐久農高OBの集りである北農クとの一戦。キャリアに勝る住化は身心ともに充実し、終始良い動きで北農クを圧倒した。北農クは攻撃の最後のツメが悪く、長谷川独りに頼る結果となり、動きが単純でボールの廻し方も遅すぎた。

両チームともにいえることはデイフエンスの甘さである。この点をおおいに考えて練習してほしい。

三　景（東京）18（7―3／11―8）11 永見ク（富山）

前半は両チームとも、速攻の出しあいで対戦したが永見クは最後のシュートが悪く、チヤンスをものにすることができなかった。

逆に三景はチャンスには得点を重ねた。後半も前半同様の経過をたどり、速攻の応しゆうとなったが、ゴールキーパーの球出しの差がそのまま得点の差になり、三景が二回戦に進んだ。

京都ク（京都）28（15―5／13―8）13 函工OB（北海道）

京都の大学OBを中心にした京都クと函館工高OBの集りである函工OBの対戦。すべり出しは互角であったが、京都クは相手のミスに乗じ、速攻とポストプレーで加点した。前半に大差をつけられた函工OBは後半、金山を中心にして反撃に転じようとしたが、さして差もつめられなかった。京都クでは11点をあげた森本のプレーは京大黄金時代のプレーヤーである市橋、竹口、山口らのプレーがめについた。

奈良ク（奈良）30（15―3／15―9）12 高松ク（香川）

前半、奈良クは鳥井、樽井のコンビネーションプレーで高松クをゆさぶり、大きなサイド攻撃で得点を重ね、大勢を決めた。

一方高松クは宮本を中心にしたポストプレーを試みるが、得点にならず、苦しい戦であった。

後半に入ると奈良クは西村を中心にして、速攻で点差を抗げ、宮本を走らせ、県命に追いこむ高松クを引き離し、快勝した。

本田技研（三重）20（12―4／8―6）10 東北学院OB（宮城）

基礎技術の練磨された本田技研と基礎体力不足のOB会の対戦。本田は立上りから速い動きで相手をゆさぶり、ミドルシュートを次々に決めた。一方の東北学院は終始変化のないプレーで対戦してしまった。しかし最後まで試合を捨てなかった東北学院OBの試合態度は賞されよう。

本田はキーパーからの球出しが実に良く、これが本田の攻撃を組みたてるのに、たいへん大きな力となったことを見逃せない。

常盤工業（岐阜）31（13―8／18―11）19 塩山ク（山梨）

常盤工業は本年度の活躍が大いに期待されているチーム。吉金、高橋らがそれぞれの特長を生かしたシュートを決め、好調にすべりだした。その結果、塩山クはいきおい前にツメルことのみに専念し後半ポストのあくところを、常盤はすかさずつき、ポストプレーでも着々加点する。

塩山クは宮原をゲームメーカーとし、平塚、雨宮らが加点したが防御の甘さはどうしようもなく、一方的な結果におわってしまったのは残念である。

三菱レ大竹（広島）22（8―5／14―6）11 盛岡商友会（岩手）

三菱レのフォーメーションに対する、盛岡商友の防御はマン・ツウ・マン的な防御であった。しかし、これが巧く消化しきれておらず、中央が大きくわれてしまい、そこに三菱レにつけこまれ、どんどん三菱レ大竹に加点されてしまった。また後半も同様なペースであったため、追いこみがかなわずに敗れた。

三菱レ大竹のパスワーク、走力は盛岡商友会より一段上のように感じられた。

西南ク（福岡）23（11―10／12―9）19 住友金属（和歌山）

住友金属は自己のペースですべり出し、調子良く加点をしていったが、西南クはしいしだいに点差をちぢめて、1点をリードして前半を終了した。

後半は完全に試合の主導権を握った西南クのペースで試合が展開した。

西南クにあっては、ブロックが多用され、二人がブロックに入りそれを利しての得点が多数あった

西南はコンビネーションが良くとれていたが、なかでも、9点をあげた白根、5点の分山、6点の五島の三人のコンビネーションプレーが光っていた。西南クの実力勝ちといえよう。

A・O・K（栃木）、北電（福井）、住化（愛媛）、常盤（岐阜）ら勝ち進む！

▽2回戦

大崎電気（埼玉）28（12―3／16―2）5 熊本ク

大曲クに快勝した熊本クも相手が国体七連覇の大崎電気とあつては、勝手が違い大差で破れた。

大崎電気はデイフエンスがきわめてかたく、熊本クは切込みができず、やむを得ず不利な体勢からうつミドルシュートがデイフエンス、キーパーの好餌となり、いずれも速攻に結びつけられ、もどるにもどれず、体力をいたずらに消耗するのみであつてどうしようもなかった。

大崎電気はキーパー以外のフイールドプレーヤー全員が得点するという快攻で、全く熊本クをよせつけず、二回戦に進んだ。

練習、コーチにめぐまれた実業団チームとすべてに乏しいクラブチームとの差が明白に出た試合であり、今日の日本ハンドボール界を表している試合であった。

A　O　K（栃木）18（9―11／9―2）13 徳山クラブ

前半はカットインプレーポストプレーを使いわけた攻撃で、速攻はほとんど見られなかった。前半2点のリードを保って有利に後半に臨んだ徳山クは後半に見せたAOKの速攻になすすべを知らずに、大差をつけられてしまった。

徳山クの敗因は後半の栃木の速攻を処理しきれなかったディフェンスの弱さに求められよう。

両チームともノーマークシュートをしばしば逃すのがめだった。ノーマークシュートを逃すのは、精神的にもたいへんまいることになるので、絶対にきめられるシュート力を養成すべきであろう。

北陸電力 26（12―2／14―8）10 光電工業

一回戦を快勝した地元北陸電力はこの試合も速攻とそれを完全にするシュートで光電工業を敗っ

た。

この試合、北陸電力のデイフュンスの前に垂直にあがるジャンプからのシュートが特に功を奏し、キーパーはタイミングをはずされ大量得点を許した。

光電工業はスタンデイングパスが多く、終始単調な攻撃を続け、いたずらに得点機を逃すばかりであった。

地元の声援に良く応え、健斗を続けている北陸電力は賞されてしかるべきであろう。

住友化学（菊本） 11（5－4／6－5）9 全静岡

両チームとも、スピードあるパスワークとフエイントを基調とする攻撃から、シュートを放つという試合展開を見せた。

両チームとも技術はほぼ互格で後半3分のチャンスを活した住化菊本が勝利を握った。

両チームともディフエンスが悪いのは一考を要しよう。

三　景 19（6－6／13－6）12 京都ク

前半、三景はサイドとポストからの多彩な攻撃、一方京都クはロングシュートを決定力にする攻撃でゆずらず、6－6の同点で終了する。

後半になり、三景は速攻を主力武器として、榊、内藤で得点をあげ、京都クを引き離した。一方京都もロングシュートをきめて県命に追いかけたが、残念ながら、走力が劣り、敗れた。

奈良クラブ 19（7－8／12－9）17 本田技研

前半は本田技研のペースで試合が進んだが、奈良は慎重に食下り一点差で終了した。

後半に入ると奈良クはコンビネーションプレーが生きはじめ、逆転に成功し、準々決勝に駒を進めることになった。

本田技研では7MT4本を含む8点をあげた大下、奈良クでは8点をあげた鳥井、樽井、西村の活躍がめだった。

常盤工業 16（7－1／9－5）6 三菱レイヨン大竹

常盤は高橋を中心にした速攻を生かし、加点をする。一方三菱はコンビネーションがとれず、シュートチャンスを生かすことができず前半を終了する。

後半、常盤は桃井の得点に始まり、着々得点を重ねる。三菱の反撃は散発的で前半の差をちぢめることができず敗れる。

三菱の防御の甘さがめだった試合であった。

全神奈川（神奈川） 24（9－3／15－6）9 西南クラブ

一回戦快勝の西南クも国体を目標に練習に励んでいる全神奈川では一寸歯がたたず、敗れ去った。

神奈川は試合開始時より、速攻を生かし、米沢、池田のコンビネーションプレーで着々と得点を重ね、リードする。

西南クはコンビがとれず、個々人のドリブルを多用する結果となり、全神奈川の防御を破ることができずに終了した。

全神奈川のゴールキーパー池田の好守は一きわ光っていた。

全神奈川　常盤工業に敗れる！

▽準々決勝

大崎電気 19（8－3／11－9）12 AOK（栃木）

	【大崎】	得	【栃木】	得
GK	福本	0	小林	0
GK	下里	0	岩瀬	0
FP	井上	3	山田	0
FP	西村	0	板屋	3
FP	近藤	2	黒岩	4
FP	片山	1	落合	1
FP	旗野	8	中野	1
FP	竹野	0	石塚	0
FP	太田	1	小沢	1
FP	谷口	1	福島	0
FP	佐々木	3	宮田	2
	19	（1）	7MT	（4）12

（主審　岡田）

大崎は新メンバーで対したので、15分間はAOKは互角に戦った。井上、近藤、西村らが入ると、ゲッター旗野が良く生かされ、シュートがさえるといった調子の試合経過であった。前半で大きくリードした大崎は後半AOKの食い下りを許したが、危げなく勝利を握った。

AOKはよく戦った。脚力不足スタミナ不足という点はあったが現在の困難な状況下のクラブチームとしては実に良く健斗した。

前半にもう少し点をつめ、大事に試合を運んでいたならば、勝てたとはいわないまでも、試合はもつれたであろう。

AOKの健斗をたたえたい一戦であった。

住友化学（菊本） 18（8－7／10－9）16 北陸電力（福井）

	【住化】	得	【北電】	得
GK	季原	0	山崎	0
GK	成行	0	畠中	0
FP	神代	4	西	0
FP	中野	0	広谷	0
FP	平野	0	中村	3
FP	松井	3	吉田	2
FP	長嶺	3	北野	1
FP	加藤	0	笹島	1
FP	北山	5	竹川	1
FP	落海	2	小笠原	8
FP	白石	1	野村	0
	18	（1）	7MT	（2）16

（主審　平田）

北電福井は惜しい試合をおとした。実業団の雄住化に食い下り、終始白勢の試合を展開したのは全く立派であった。

立ちあがり2点を先取した北電はもう一点の連取がほしかった。

一方住化は2点先取されたものの経験十分であり、落ちついた試合運びを見せ、ポストに入った選手を使ってのブロックプレーを多用して、その後はシーソーゲームという経過をたどった。

後半に入っても、両チームとも互いにゆずらず、終始好ゲームを展開した。

北電が小笠原に得点源が集中し

ているのは、住化のどこからでも得点できる体勢に比べるとやや難点がある。

いずれにしても準々決勝にふさわしい白勢の好ゲームであった。

北電福井のようなチームがどしどし成長をとげて、球界をますます面白くしてくれるように望むものである。

地元の声援に応え、よく健斗した北電の斗志は高く評価されてしかるべきであろう。

三景 22（10—5　12—9）14 奈良クラブ

得	【三景】		【奈良】	得
0	尾形	GK	松本	0
0	小野	GK	保田宏	0
1	竹村	FP	鳥井	4
3	江名	FP	三浦	1
1	外間	FP	中村二	0
5	榊	FP	樽井	5
6	高梨	FP	中村功	0
6	内藤	FP	西村	3
0	伊藤	FP	保田行	1
0	山原	FP	島井	0
0	河原	FP	木村	0
		主審 川口		
22	（0）	7MT	（1）	14

成長いちぢるしい三景は高梨・内藤の両新人がチームにとけこみチーム力を高めているが。この試合でも、両新人がベテラン陣の巧妙なアシストによって、良く得点をした。

三景は前半セットオフェンスからボールを良くまわし、得点をあげていく。一方奈良クは試合が進むにつれ、しだいしだいに攻撃の動きがなくなり、前半は10—5のダブルスコアで終了した。

後半に入っても、三景のペースは全く変らず、着々加点し、差を開いていった。

奈良クも時折は反撃にでるが、ミスが多く、点差つまらぬどころが逆に開くばかりになっていった。

奈良クの練習不足からくるスタミナ不足とコンビネーションの不備は大きな差となって現れた。クラブチームが現在もっている最大の悩みが現れ、実業団の軍門に降った。

常盤工業 20（10—4　10—6）10 全神奈川

得	【全神】		【常盤】	得
0	池田弘	GK	渡辺	0
0	青木	GK	森	0
0	正本	FP	中島	1
1	杉山	FP	高橋	10
2	米沢	FP	中板	1
2	中村	FP	桃井	0
1	林	FP	山田	6
1	安達	FP	島村	0
1	穴沢	FP	大野	0
2	池田鉄	FP	吉金	2
0	北橋	FP	伊藤	0
		主審 佐野		
10	0	7MT	（0）	20

予想外の大差となって、全神奈川が破れた。昨年度の準優勝チームこのような形で敗れると誰が予想したろう。

クラブチームという不利な条件の中、夜に集り、黙々と練習を続け、国体一途に励んでいた全神奈川があっさりと常盤工業の前に敗れてしまった。

前半から常盤は快調にせめ、スピードある動きとこれまたスピードあるパスワークで全神奈川の防御陣をゆさぶり、決定力ある高橋のロングシュートと山田のサイドからのシュートをてきかくに決めて大差をつけた。

後半もこの調子は続き、常盤が着々と加点するのに対し、全神奈川はもちまえの細い動き、フェイントプレーがでず、遅い動きから時折単発シュートを打つにおわり決定的なチャンスが作れないままにおわった。常盤の成長も今年の嬉しい話題になろう。

大崎・三景決勝へ

住友・常盤は敗退

▽準決勝

大崎電気 24（13—7　11—5）12 住友化学

得	【住化】		【大崎】	得
0	季原	GK	福本	0
0	成行	GK	下里	0
0	神代	FP	井上	7
0	中野	FP	西村	2
0	平野	FP	近藤	5
0	松井	FP	片山	1
4	長嶺	FP	籏野	2
0	加藤	FP	竹野	1
3	北山	FP	太田	3
2	落海	FP	谷口	2
3	白石	FP	佐々木	1
		主審 川口		
12		7MT	（5）	24

住化は年々力をつけ、大崎とのレベルが近づいて来つつあり、この一戦その意味において多いに期待されたが、結果はダブルスコアと開き、いささか失望させられたというのが実感である。

前半、大崎は速いボールまわしを軸に、セットオフェンスからのポストプレーをよく生かして、得点したが、これに対する住化菊本もよく両サイドからのシュートをきめて、好ゲームを展開したが、及ばず13—7で終了。

後半は住化菊本がスタミナぎれとなり、前半のような攻撃ができず、苦しい体勢からうつシュートを阻まれ、それをそのまま速攻の糸口とされて、大崎の速攻を浴び大差をつけられてしまった。

大崎電気の一方的な快勝ということが云えよう。この試合大崎はゴール・キーパーを除くフィールドプレーヤー全員得点という攻撃を見せた。

三景 17（9—4　8—5）9 常盤工業

得	【常盤】		【三景】	得
0	渡辺	GK	尾形	0
0	森	GK	小野	0
3	中島	FP	竹村	0
1	高橋	FP	江名	0
1	中枝	FP	外間	2
1	桃井	FP	榊	2
1	山田	FP	高梨	10
0	島村	FP	内藤	3
0	大野	FP	伊藤	0
2	吉金	FP	山原	0
0	伊藤	FP	河原	0
		主審 桶家		
9	（2）	7MT	（1）	17

実業団同志の争いとなった。三景は進境いちぢるしい。一方常盤も山田を新加入させて、戦力は増大している。どのような結果になるかが期待されたが、三景が速攻で得点を重ねて、一方的な勝利におわってしまった。

4日の準決勝の体育館での試合と異なり、常盤はロングシュートがほとんど決らず、逆にキーパーボールからの球出しによって、速攻をかけられ、帰らなければならないという後手々々に廻ってしまい、前半で5点差をつけられてしまった。三景はこれらのキーパーボールからのチャンスを高梨、内藤の両新人が良く生かし、得点に結びつけていた。

後半に入っても、常盤のシュートはいずれもキーパーの好守にはばまれ、これがキーパーボールから尾形の好配球を呼び、これに合せる高梨を中心にするフィールドプレーヤーとの呼吸がピタリと合い、シュートが決るという、三景の速攻がますますさえるといった経過をたどっているうちに点差は開き、試合はおわった。

常盤工業はセットオフェンス・速攻ともに準々決勝までに見られたような形のスピードがなく、三景を追いこむまでには至らなかった。

三景のいちぢるしい成長ぶりには目を見はるものがある。

選抜、実業団と続く大会が見ものとなる。

☆　☆　☆

大崎八連覇（男子）

▽決勝

大崎電気 16（7－5／9－8）13 三景

	【三景】	得
GK	尾形	0
GK	小野	0
FP	竹村	0
FP	江名	4
FP	外間	1
FP	榊	0
FP	高梨	4
FP	内藤	4
FP	伊藤	0
FP	山原	0
FP	河原	0

	【大崎】	得
GK	福本	0
GK	下里	0
FP	井上	7
FP	西村	0
FP	近藤	4
FP	片山	2
FP	籏野	0
FP	竹野	1
FP	太田	1
FP	谷口	1
FP	佐々木	0

（主審 岡前）

16（3）7MT（1）13

進境いちぢるしい三景はこれまで快調に試合を進め、高梨、内藤の両新人の活躍もあり、危げない試合ぶりで決勝に進出してきた。

昨年のダークホースから、本年度は一やく、決勝を狙うチームに大きく成長してきた。

一方大崎電気は新旧の交替機に来ていて、チーム力はやや落ち気味といわれながらも、全日本総合では数ある学生チームをなぎたおし、決勝戦では全立大に敗れはしたが、その試合ぶりは定評通りのものをもっている。

以上のような意味あいにおいてこの一戦大いに期待された。

前半、三景はミドルシュートとポストプレーを併用して、大崎を崩さんとし、一時は三景のペースで試合が進んだ。

一方大崎電気は得意の速攻がさえず、得点が増えず苦しんだがしだいしだいに調子をととのえ、前半終了時には2点のリードを保っていた。

後半に入っても、その形成は一進一退で、終始大崎がリードしている形で試合は進んだ。

大崎が本来の戦いぶりを見せ、三景ももてる力を出して、戦い、好ゲームとなった。

三景はついに前半の2点差をはねかえすことができずにおわった両軍の攻守もさることながら、球趣を一層もりあげたのは、両軍キーパーの好守があった。福本・尾形ともに日本を代表するキーパーであり、互いにゆずらぬ好守を見せ、会場を湧かせていた。

三景の進境は特筆すべきものであり、今後の試合がより一層もりあがるものになろう。

▽三位決定戦

常盤工業 23（12－8／11－11）19 住友化学（菊本）

たちあがりから、両チーム同形のダブルポスト戦法で攻撃を行った。

ディフェンスの差で常盤がリードして前半を終了。

常盤の攻撃では、山田、高橋がダブルポストでよっによって引きおこされるディフェンスの穴をよく見て、うまく攻め、ロングシュート、たおれこみシュートを決めたのは特筆されよう。

前半の住化の防御は一考を要しよう。

後半戦は前半のリードに気を良くした常盤は山田のミドルシュートなどで完全に主導権を握り、そのまま終盤までその差を保った。

常盤のスピード勝ちということが云えよう。

住化は負傷者がでたりでもてる力を十分に発揮できなかったのは惜しまれる。

終始好ゲームを展開したのは、実業団屈指の好チームだからであろう。

準決勝に残った4実業団の実力が近づいたことは喜ばしい。

大洋デパート二冠なる

田村紡は決勝で敗退

一般女子

▽一回戦

全福井（福井）18（9－0／9－4）4 愛媛ク（愛媛）

全福井の練習量の豊富さがものを云った一戦。特に立林のロングシュートと万のポストプレーのコンビネーションが巧くとれ、これが7MTを多く生んだが全福井にきわめて有利な試合運びとなった。

愛媛クの攻撃はバックの前で一たんとまるので、スピードがそがれ、得点に結びつかなくなるのでこれが大きな敗因となった。

ブラザー工（愛知）14（6－2／8－2）4 全北海道（北海道）

ブラザー工業の大勝におわった全北海道はブラザーの強い当りに負け思うように動くことができなかったのが、敗因である。

ブラザーは走、投を含む全体力技術で全北海道にすぐれており、順当な勝ちで二回戦に進んだ。

大阪スターズ 22（9－4／13－4）8 氷見ク（富山）

たちあがり氷見は快調に、インターセプトからの速攻とミドルシュートによって、三点の先取をした。

大阪スターズは地力に自信があり、しだいに調子をあげ、速攻、ポストプレーを織りまぜた多彩な攻撃で、前半で勝利を不動のものとして、そのまま後半を押しきった。

全岩手 11（5－4／6－2）6 全広島

前半は一進一退の互格の形成で試合は進んだが、チームプレーに若干のまとまりのある全岩手が一点先行して終了。

後半に入ると、岩手のチームプレーがますますまとまりを見せ、点差を拡げていった。

対して広島はコンビネーションがとれず、加えて守勢に立ち、自滅した。岩手の順当な勝利と云えよう。

▽準々決勝

田村紡（三重）20（8－3／12－1）4 全福井

	【田村】	得
GK	渡辺美	0
GK	坂上	0
FP	種村	1
FP	渡辺好	2
FP	水谷	1
FP	小林	4
FP	清水	5
FP	甲村	3
FP	吉開	0
FP	渡辺信	4
FP	若林	0

	【福井】	得
GK	山方	0
GK	石田	0
FP	万	0
FP	池端	0
FP	立林	2
FP	辻	0
FP	高木	0
FP	内海	0
FP	土田	1
FP	細川	0
FP	友田	1

（主審 岡田）

4（0）7MT（1）20

試合開始直後、前半10分までのすざまじいばかりの全福井の斗志が試合をもりあげたが、しだいに田村のペースとなり、ポストプレ

ー、ブロックプレーなどを盛りこんだ多彩な田村の攻撃がしだいに功を奏し、点差は拡がっていったのはやむを得まい。

福井はもう少し、ロングシュートを使って見たらと思ったが、後半になると、田村紡の一方的な攻撃の前にあえなく敗れさった。

力の差はいかんともしがたいという戦いぶりであった。

三菱鉛筆（神奈川） 11（6—3, 5—4）7 ブラザー工業

	【三菱】	得	【ブ工】	得
GK	吉田	0	安谷	0
GK	本庄	0		
FP	三井田	0	井上	1
FP	鈴木	1	朝倉	2
FP	姫野	2	鹿島	0
FP	落合	6	楠田	0
FP	佐々木洋	0	家田	1
FP	江川	1	近藤	0
FP	佐々木房	0	五十嵐	1
FP	阿部	0	堀田	2
FP	蓮見	1	日浦	0

（主審 若山）

11（2）7MT（1）7

シュート力に勝る三菱は自軍ペースをくずさず着実に加点した。

ブラザー工業はセットオフェンスからの攻撃に今一歩の鋭さがたらず、また帰陣の遅さをつかれ、落合らの速攻を許し、自滅してしまった。

走力、シュート力の差が勝敗を決っした。四強につぐチームにと成長が楽しみにされていたブラザー工業も今一歩のところまできたという感じである。将来の成長を望みたい。

大崎電気（埼玉） 15（8—1, 7—5）6 全岩手

	【大崎】	得	【岩手】	得
GK	川崎	0	森	0
FP	加藤	2	八百枝	1
FP	早川	0	熊谷	3
FP	鈴木	6	中島	0
FP	日向野	1	関	1
FP	木幡	2	八重樫	0
FP	中野	2	金野	0
FP	山崎	0	似島	0
FP	栗林	0	葛岡	1
FP	三浦	2		

（主審 岡田）

15（1）7MT（0）6

大崎の一方的ゲームに終始した東京女体大の熊谷、中島のコンビをもつ岩手も練習量豊富な大崎の体力、スピードの前にはなすところなく前半をおわった。

後半、全岩手の反撃が見られ、やや試合を面白くした。後半の調子が前半からでていれば惜しまれる。

全岩手の試合を捨てない後半の粘りとガンバリは賞されようが、攻撃方法が単調であったため、大差で敗れた。

三菱・大崎敗退す

▽準決勝

田村紡 17（8—3, 9—5）8 三菱鉛筆

	【田村】	得	【三菱】	得
GK	辺辺美	0	吉田	0
GK	坂上	0	本庄	0
FP	種村	4	三井田	1
FP	渡辺好	1	鈴木	0
FP	水谷	2	姫野	1
FP	小林	5	落合	2
FP	清水	2	佐々木洋	0
FP	甲村	2	江川	1
FP	吉開	0	佐々木房	0
FP	渡辺信	1	阿部	0
FP	若林	0	蓮見	3

（主審 岡田）

17（1）7MT（2）8

田村紡は前半速いパスワークと速攻で三菱の防御を乱し、大差をつけた。

一方三菱は攻撃が単発におわり集中的な力を発揮できなかった。

後半も田村の一方的なペースで試合は終始した。

力の差はかなりあるように考えられる。三菱の奮起を望みたい。

大洋デパート（熊本） 19（9—0, 10—6）6 大阪スターズ

	【大洋】	得	【大阪】	得
GK	安部	0	辻村	0
GK	小原	0	中村	0
FP	新保	3	北口	3
FP	米	5	北村	1
FP	渡辺	3	田井	1
FP	射場	1	山崎	0
FP	垂水	3	古川	0
FP	枝尾	4	山口	1
FP	三宅	0	保子	0
FP	下枝	0	吉川	0
FP	島田	0	吉田	0

（主審 関川）

19（0）7MT（0）6

力の差がはっきりと表れたゲーム。大阪は北口、北村が動くだけで、これに続くプレーヤーがいないため、シュートチャンスを生かせずに前半を零封された。

後半に入り、大阪は大洋のメンバーチエンジの間をぬって、6点を入れたのは善戦といえよう。大洋は速攻からもセットオフェンスからも、多彩な攻撃をかけ、防御の甘い大阪のディフェンスを好きなようにかき廻し、大勝をした。

大洋デパート 9（3—6, 6—1）7 大崎電気

	【大洋】	得	【大崎】	得
GK	安部	0	川崎	0
GK	小原	0	山田	0
FP	新保	2	加藤	1
FP	米	0	早川	1
FP	渡辺	2	鈴木	2
FP	射場	3	日向野	0
FP	垂水	0	木幡	2
FP	枝尾	1	中野	1
FP	三宅	1	山崎	0
FP	下枝	0	栗林	0
FP	島田	0	三浦	0

（主審 桶家）

7（0）7MT（1）9

大崎は惜しい試合をおとした。

前半大洋が大崎のディフェンスを攻めあぐむ間に大崎は点差をつけ前半を終了したが、後半に入ると大洋は持ち味のフェイントプレーを存分に使い、大崎のディフェンスをゆさぶり、逆転勝ちをはたした。大崎は今一歩の所までいきながら、ついに決勝戦に出られなかった。

▽決勝戦

大洋デパート 12（6—2, 6—5）7 田村紡

	【大洋】	得	【田村】	得
GK	安部	0	渡辺美	0
GK	小原	0	坂上	0
FP	新保	1	種村	2
FP	米	3	渡辺好	2
FP	渡辺	3	水谷	1
FP	射場	0	小林	1
FP	垂水	3	清水	0
FP	枝尾	2	甲村	0
FP	三宅	0	吉開	0
FP	下枝	0	若辺美	1
FP	島田	0	若林	0

（主審 岡前）

12（4）7MT（1）7

大洋ペースで試合は進んだ。大洋はミドルシュート、ポストプレーと自由な攻撃を行い田村紡の防御陣をまどせ、得点をあげた。

これに対し、田村紡はエリア前でのリターンパスが小さく、大洋の出足のよいつぶしに合って、鋭い切込みができず、折角ものにした7MTも大洋ゴールキーパーの好守にあって、ついに追いこめなかった。



一般女子決勝（光島磯雄氏撮影）

大洋は夏の全日本総合に続いて二冠を得た。久しぶりの真の意味での四強の激突は、大洋がおちついた試合ぶりで栄冠をにぎることとなった。選抜・実業団と続く争いが見ものとなろう。

この試合7MT、退場者ともに多数見られたのは一考を要そう。

▽三位決定戦

大崎電気 9（4—3, 5—1）4 三菱鉛筆

両チームとも気抜けしたのか本来の姿を忘れ、ロングシュートに頼りすぎたため、興趣をそがれた三菱のシュートが大崎の攻撃をさ

そい、これが得点と結びついたのが、両者の勝敗の別れめとなった。

選抜勢強し

決勝は全静岡―兵庫選抜

下関中央早くも敗退

高校男子

▽一回戦

新居浜工(愛媛) 8（5－4　2－3　……　1－1　0－0）8 小杉高(富山)

抽せん勝ち

前半両チームともこれぞというチームプレーができず、小杉のロングシュートの決定力が勝負をつけるかに見えたが、後半14分に小杉は追加点をあげ、その後、小杉は気のゆるみが見られた。

そこに新居浜工はつけこみ、後半20分前後にたてつづけてゲットし、7－7で延長戦に入る。

延長後も1点ずつをあげ、8－8の同点、抽せんになり、新居浜工が勝利を得た。

両チームとも勝敗にとらわれ、後半に入ってから、雑なディフェンスになり、粗暴な行為の見られたのは残念である。

熊本選抜 12（8－7　4－1）8 麻生高(茨城)

前半はとりつ、とられつの一進一退をくりかえしていたが、熊本選抜はしだいに選抜特有の個人技を発揮した。一方麻生も体力・走力を生かして、十分な力を出したが、熊本は一点リードして、前半をおわる。

後半は、両チームとも、ディフェンスが荒くなり、退場者を出した。麻生はノーマークシュートのチャンスがしばしばあったが、熊本のゴールキーパーの再三の好守にはばまれ、敗れた。

▽準々決勝

新居浜工 11（5－1　6－7）8 下関中央工(山口)

得	【下関】		【新工】	得
0	山　徳	GK	小　野	0
0	西　村	GK	一　色	0
2	広　井	FP	加　藤	1
0	今　浦	FP	松　木	3
0	吉　田	FP	森　谷	0
6	中　川	FP	藤田治	0
0	酒　井	FP	白　石	0
0	川　谷	FP	藤田明	3
0	古　谷	FP	渡　辺	0
0	鬼　村	FP	喜　井	4
0	西　島	FP	橋　本	0
8	(3)	7MT	(0)	11

（主審 川口）

インターハイ優勝の下関中央が敗れた。

前半新居浜工はポストをうまく生かした攻撃が成功した。

一方中央工は全くシュートが決らず、僅かに中川の1点にとどまった。

後半中央工はサイドから攻撃をかけ、これによって得た7MTを決めて反撃に出、新居浜の選手の退場の間をぬって追いあげたが、新居浜も巧くシュートを決めたためついに追いきれなかった。

羽水高(福井) 10（6－3　4－6）9 全北海道

得	【福井】		【北道】	得
0	田　中	GK	上　田	0
0	野　路	GK	鈴　木	0
1	中　村	FP	小　野	1
1	村　井	FP	山　中	2
2	谷　下	FP	山　本	2
1	吉　川	FP	東　谷	0
2	佐々木	FP	小　林	2
3	塚　田	FP	沢　村	1
0	古　川	FP	佐　藤	0
0	坂　野	FP	加　藤	0
0	加　藤	FP	三　谷	1
10	(2)		(1)	9

（主審 川口）

前半の福井セットオフエンスが良く決まっていた。全員のむだのない動きが北海道の防禦をゆさぶり、北海道に差をつけた。

後半北海道は追いあげ、福井のミスをついて一時は同点にまでこぎつけたが、福井のサイド攻撃が功を奏し、福井はベスト・フォアに残った。両チームの健斗がたたえられよう。

兵庫選抜 18（5－3　13－2）5 全山形

得	【兵庫】		【山形】	得
0	伊　藤	GK	佐　藤	0
0	吉　田	GK	大　越	0
1	松　岡	FP	中　里	1
3	横　山	FP	庄　司	0
6	林　恒	FP	柴　田	0
3	川　口	FP	青　柳	2
1	前　田	FP	大　江	0
2	淡　川	FP	芳　賀	2
2	野　津	FP	戸　津	0
0	林　光	FP	長　瀬	0
0	石　井	FP	渡　辺	0
18	(2)		(2)	5

（主審 関川）

兵庫は長身選手をうまく生かしロングシュートとポストプレーをいかして攻めた。

山形は動きに変化なくシュートミスから反撃された。特に後半は兵庫に速攻とロングシュートをたてつづけに攻撃され、大差になった。

全静岡 16（4－5　7－6　……　3－0　2－1）12 熊本選抜

得	【熊本】		【静岡】	得
0	柳　川	GK	森　切	0
0	清　水	GK	新　村	0
1	竹下臣	FP	岩　崎	0
7	田　上	FP	杉山英	1
0	古　沢	FP	望　月	3
0	坂　本	FP	渡　辺	3
0	吉　本	FP	杉山昇	2
1	関	FP	池　田	0
1	竹下俊	FP	片　山	5
2	高　田	FP	長谷川	1
0	宮　本	FP	杉山広	1
12	(2)	7MT	(1)	16

（主審 佐野）

熊本、静岡ともに防御があらく互に自己の力を出しきれず、荒れた試合になったが、熊本は後半になり、静岡の大きくふるセットオフェンスにつききれず、延長戦に入ってからはスタミナ不足のためか、動きが悪くなり敗れた。延長戦の割には凡戦であった。

▽準決勝

兵庫選抜 17（9—7 8—4）11 新居浜工

【兵庫】	得		【新工】	得
伊藤	0	GK	野小	0
吉田	0	GK	一色	0
松岡	2	FP	加藤	0
横山	5	FP	松木	2
林恒	4	FP	森谷	1
川口	1	FP	藤田治	0
前田	0	FP	白石	2
淡川	1	FP	藤田明	4
野津	4	FP	渡辺	0
林光	0	FP	喜井	2
石井	0	FP	橋本	0

（主審 岡田）

11（1）7MT（0）17

新居浜工の速攻に対する兵庫のセットオフェンスと両者たがいにゆずらぬ白勢の戦いに前半は経過した。しかし、兵庫は長身の選手が放つ左右の45度附近からのシュートが良く決り、これが新居浜工を最後まで苦める結果となった。

兵庫は選抜のもてる長所を十分に発揮し、決勝に進出した。長身選手を集めたその攻撃力は一級であった。

全静岡 19（8—4 11—6）10 羽水高

静岡の勝因の第一にあげられるのはまず速攻であろう。羽水は開始早々にゲットしたが、その後は静岡のディフェンスをくずせずに得点のチャンスをいっしていた。

【静岡】	得		【羽水】	得
森切	0	GK	田中	0
新村	0	GK	野路	0
岩崎	1	FP	中村	5
杉山英	3	FP	村井	2
望月	0	FP	谷下	0
渡辺	5	FP	吉川	3
杉山昇	1	FP	佐々木	0
池田	0	FP	塚田	0
片山	6	FP	古川	0
長谷川	2	FP	坂野	0
杉山広	1	FP	加藤	0

（主審 関川）

10（4）7MT（1）19

全般的に云って羽水のディフェンスの甘さもあったが、静岡の渡辺、片山のロングシュートが効果的に決っていたことが第二の勝因であろう。



高校男子　全静岡—羽水高の戦い（福井新聞社提供）

第二延長の末静岡に

▽決勝

全静岡 20（7—10 7—4 0—0 2—2 0—2 4—0）18 兵庫選抜

【兵庫】	得		【静岡】	得
伊藤	0	GK	森切	0
吉田	0	GK	新村	0
松岡	4	FP	岩崎	0
横山	4	FP	杉山英	5
林恒	4	FP	望月	1
川口	2	FP	渡辺	2
前田	1	FP	杉山昇	0
淡川	3	FP	池田	0
野津	0	FP	片山	7
林光	0	FP	長谷川	5
石井	0	FP	杉山広	0

（主審 若山）

20（4）7MT（0）18

白熱して、結局第二延長にまでもつれこんだ一戦となった。

両軍ともに各選手は十分な個人技をもちあわせていて、それが軸になる攻撃に終始した。

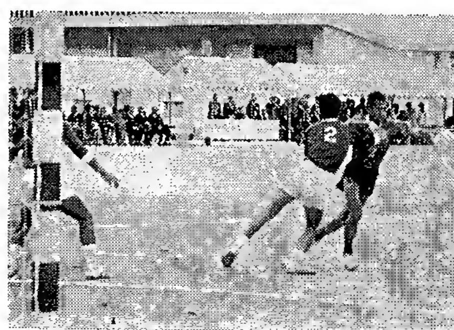
これは混成チームということからくるのであろうが、攻防ともに十分な個人技の基礎の上にたったチームプレーが望まれよう。

このように今年度の高校男子は選抜チーム同士の決勝戦となったことは、今後の国体のチーム編成の上に大きな問題を投げかけよう。一つには、明るい話題ともいえよう。今後の日本ハンドボール界を背負う若い力が混成チームになっても十分に力を発揮できるというのは、ナショナルチーム、ジュニアナショナルチームを編成する上においても明るい話題といえる。

▽三位決定戦

羽水高 10（4—2 6—5）7 新居浜工

スタートはどちらにもかたさがあり、一進一退となった。後半になり、羽水のミドルシュートがポストプレーと合せ生き、着々加点。新居浜は喜井が完全にマークされたことと、本来の速攻が封じられたことが敗因である。



高校男子　羽水高—新居浜工の戦い（福井新聞社提供）

菊地農圧倒的強さ

二・三・四位には選抜チームが入る

高校女子

▽一回戦

全北海道 6（3—3 3—2）5 山陽女（広島）

緒戦のためか、両チームとも動きが少なく、力をだしきれずにおわってしまった感があった。

北海道はセットオフェンスのフォーメーションにこだわりすぎ、山陽は相手の得点につながるミスが多すぎたのが目だった。

全静岡 10（3—3 7—4）7 小松市女（石川）

前半は両チームともに速い動きを見せて、多くのチャンスを作ったが、決定力なく、あまりものにできなかった。

後半に入ると、全静岡は疲れをしらぬ速い動きとミドルシュートによって点差を開いた。

静岡の足とシュートが勝因の第一であった。

▽準々決勝

菊池農（熊本）12（5—2 7—2）4 全北海道

	【菊池】	得	【北海】	得
GK	松田	0	高田	0
GK	中川	0	中瀬	0
FP	村中	1	阿保	3
FP	村上	5	小川	0
FP	蔵田	2	菊地	0
FP	水上	2	藤浪	0
FP	田尻	0	後藤	0
FP	剣	2	蘇田	0
FP	鶴田	0	米田	0
FP	磧上	0	柴田	0
FP	原口	0	西尾	1
（主審 桶家）	12 （0）	7MT	（0） 4	

本年度圧倒的な強さでインターハイを征した菊池農。国体でもその強味は発揮された。

菊池農は試合開始当初より得点を重ねた。北海道は終始同じ攻めをして、菊池農のディフェンスをくずせなかった。菊池農はダブルポストからの攻撃がきわめてさえほとんど成功していた。チームプレーの勝ちといえよう。

全岩手 5（1－0、4－1）1 福井選抜

	【岩手】	得	【福井】	得
GK	坂野	0	小林	0
GK	小原成	0	大島	0
FP	山口	0	中谷	0
FP	盛川	2	黒田	0
FP	鎌田セ	0	谷口	0
FP	小原好	0	鈴木	1
FP	岩問	0	静野	0
FP	高橋	2	高田	0
FP	照井	0	久保	0
FP	中島	1	杉山	0
FP	鎌田真	0	森田	0
（主審 河本）	5 （0）	7MT	（0） 1	

両チームともにスタートはすこぶる悪かった。特に福井は再三のノーマークシュートを失敗して、得点を逃がしていた。

福井はシュート力はあるように思えるが、どうも細かいプレーに欠け、得点を逃していた。前半両チーム合せて僅か1点という拙攻であった。

後半に入ると、岩手がよく走り多彩な攻撃を見せて勝利を手にした。福井は前半の拙攻が惜しまれた。

高校女子の熱戦（福井新聞社提供）

千葉選抜 8（4－2、4－3）5 精華女高（京都）

	【千葉】	得	【精華】	得
GK	戸村	0	北本	0
GK	御口	0	井上	0
FP	金子	3	山田	0
FP	大塚	1	辻	2
FP	蓮見	2	宮脇	0
FP	林	0	今井	0
FP	荒井	0	福田	1
FP	安川	1	木村	2
FP	塩谷	0	上島	0
FP	行方	0	坂本	0
FP	斎藤	1	湯浅	0
（主審 桶家）	8 （1）	7MT	（1） 5	

関東地区を選抜の力で勝ちぬいた千葉、関西地区からの精華の対戦。

ともに精彩なく凡戦であった。とにかくシュートまでのつなぎをなんとか形作った千葉が精華を押え、勝利を握った。精華にもう一息のガンバリと気力が望まれるところである。

全静岡 7（2－1、5－2）3 新居浜高（愛媛）

	【新高】	得	【静岡】	得
GK	西条	0	服部洋	0
GK	小原	0	鈴木	0
FP	磯部	0	服部恵	0
FP	田中	1	内田	3
FP	大塚	0	松永	0
FP	加藤	0	下山	1
FP	山本	2	首藤	1
FP	曽我部	0	久保田	0
FP	金村	0	稲垣	2
FP	泉	0	加藤	0
FP	森実	0	海野	0
（主審 藤田）	3 （0）	7MT	（0） 7	

前半は1点を争う好ゲームとなり、互いに速攻を出しあう面白い展開になった。新居浜はキーパーの好守があり、静岡はディフェンスの力が主になって、なかなか得点はあげられなかった。

後半になると、静岡は前半に比べると細かいプレーがシュートにつながるようになり、着々と加点し、新居浜高をひきはなした。

新居浜高はインターハイに見せた加藤・山本コンビが得点をさしてあげられなかったのが苦戦の因となった。

▽準決勝

菊池農 11（4－1、7－1）2 全岩手

	【岩手】	得	【菊池】	得
GK	坂野	0	松田	0
GK	小原成	0	中川	0
FP	山口	0	村中	5
FP	盛川	2	村上	0
FP	鎌田セ	0	蔵田	1
FP	小原好	0	水上	2
FP	岩間	0	田尻	1
FP	高橋	0	剣	2
FP	照井	0	鶴田	0
FP	中島	0	磧上	0
FP	鎌田真	0	原口	0
（主審 苫山）	2 （0）	7MT	（1） 11	

菊池農は強い。攻撃もさることながら、ディフェンスは抜群にすぐれている。

菊池農は速攻ともち味のポストプレーで多彩な攻撃ぶりを見せて着々加点する。

一方の岩手は単調な攻撃しかないので、凡シュートしか打てず、菊池農の前にあっさりかぶとをぬいだ。

技術・走力などすべての点に勝る菊池農の圧倒的な勝利であった。

全静岡 9（2－1、3－4、1－1、0－0、2－0、1－2）8 千葉選抜

	【静岡】	得	【千葉】	得
GK	服部洋	0	戸村	0
GK	鈴木	0	御園	0
FP	服部恵	0	金子	4
FP	内田	5	大塚	1
FP	松永	1	蓮見	0
FP	下山	0	林	0
FP	首藤	1	荒井	0
FP	久保田	1	安川	0
FP	稲垣	0	塩谷	0
FP	加藤	0	行方	6
FP	海野	1	斎藤	3
（主審 河本）	9 （1）		（2） 8	

第二延長にもつれた一戦。選抜

チーム特有の個人技を発揮し、互いにゆずらない熱戦でった。チームプレーがない点は今後の課題となろうか、選抜チームの良さをどちらも出しての一戦であった。

▽決勝戦

菊池農 11（3－0、8－3）3 全静岡

得	【菊池】		【静岡】	得
0	松田	GK	服部洋	0
0	中川	GK	鈴木	0
3	村中	PF	服部恵	0
2	村上	PF	内田	0
3	蔵田	PF	松永	1
1	水上	PF	下山	0
0	田尻	PF	首藤	1
2	剣	PF	久保田	0
0	鶴田	PF	稲垣	1
0	磧上	PF	加藤	0
0	原口	PF	海野	0
11	(1)	7MT	(0)	3

（主審 関川）

前半は菊池村中のロングシュートによってリードする。後半に入り、静岡も散発的に得点をかえしたが、菊池農の厚いディフェンスにあいシュートチャンスを作ることがむずかしく、菊池農の堅城の前に敗退した。

菊池農はこの試合は速攻とロングシュートを主武器に戦い、オールラウンドな強さを見せた。

インターハイ、国体を通じ、一試合を除き、10点以上の得点を出し、いずれもダブルスコアに押えこんだ菊池農の力は抜群である。監督・選手の努力の賜である。

大阪イーグルス雪じよくなる

決勝は教職員と同じ顔合せ

教員男子

▽一回戦

熊本教員 26（8－5、18－8）13 香川教員

香川はゲッター石原とともに攻められる選手がいないため、攻撃がとぎれ、チャンスをつぶしていた。熊本は全員の動きが良く、攻守・走ともにそろい、一方的ゲームとなった。

岩手教員 15（6－5、6－7、1－2、2－1）15 静岡教員

抽せん勝ち

ポイントゲッターを中心にしたじっくりした攻めあいでシーソーゲームとなる。ブロックプレーをなど細いプレーをおりまぜ、巧みな試合運びであった。延長戦に入っても決らず、岩手が幸運の勝ち星を引いた。

▽準々決勝

▽三位決定戦

千葉選抜 6（4－1、2－0）1 全岩手

先取点は岩手がとったが、その後は全く得点がとれず、千葉に同点にされたあとは千葉のペースで試合は進んだ。

脚力・シュート力に一日の長が見られた千葉の順当勝ち。金子の活躍が特に眼についた。

皇后杯順位 ① 熊本（女子二部門優勝は第17回の熊本以来）② 岩手、③ 静岡、三重、⑤ 埼玉、千葉、⑦ 神奈川、福井。

埼玉教員 17（6－7、11－8）15 熊本教員

得	【熊本】		【埼玉】	得
0	島田	GK	高橋	0
0	中津海	GK	上久保	0
2	津田	PF	金子	0
4	元田	PF	三枝	0
0	谷脇	PF	松田	1
3	沢田	PF	北井	5
0	松田	PF	多勢	0
0	竹原	PF	結城	3
4	平井	PF	高戸	5
0	森	PF	高田	3
2	矢住	PF		
15	(0)	7MT	(1)	17

（主審 平田）

両チームとも全く互角の形勢。多彩な攻撃を見せてシーソーゲームの展開であった。埼玉は冷静に試合を運び、やや難点のある熊本のディフェンスをつき、勝利を得た。熊本教員の成長は明るい話題となろう。

福井教員 23（9－8、14－6）14 岡山教員

得	【福井】		【岡山】	得
0	越田	GK	井上	0
0	竹田	GK	三宅	0
2	華立	FP	石川	0
1	竹野	FP	楠戸	2
0	森下	FP	大西	1
0	塚崎	FP	川上	0
1	鶴野	FP	船越	7
8	坂野	FP	田口	0
6	小谷内	FP	藤本	3
1	福田	FP	竹林	0
4	田島	FP	永井	1
23	(2)	7MT	(4)	14

（主審 岡村）

前半ゆっくりしたペースの岡山やや速いペースの福井と対照的な試合運びで9－8。後半疲れの見えた岡山に対し、福井のブロックプレーを基調にしたポスト・サイド攻撃が功を奏した。

富山教員 13（6－3、5－8、1－0、1－1）12 函館教ク（北海道）

得	【函館】		【富山】	得
0	長谷川	GK	上田	0
0	後藤	GK	宮田	0
0	滝本	FP	京田	1
4	武田	FP	永見	5
1	藤野	FP	秋元	1
1	川上	FP	中山	1
4	新橋	FP	古木	2
1	宮崎	FP	安平	2
1	南波	FP	旅	1
0	石井	FP	越前	0
0	近藤	FP	金原	0
12	(0)	7MT	(0)	13

（主審 平田）

先取点をとり、スタートは良かった函館だったが、パスワークが乱れたところを富山につかれ、前半は6－3。北海道は後半になり調子をとりもどし、追いあげ延長戦にもちこむ。

延長後は常に富山が先手をとりそつなく勝利をものにした。

大阪イーグルス 29（12－4、17－7）11 岩手教員

得	【大阪】		【岩手】	得
0	奥浜	GK	石杜	0
0	島崎	GK		
3	東	FP	海野	0
3	井上	FP	中島	0
3	青木	FP	宮野	1
1	北岡	FP	高田	3
5	加藤	FP	加藤	0
2	松尾	FP	足沢	0
2	木村	FP	小原	0
3	福井	FP	増田	7
7	樫塚	FP		
29	(0)	7MT	(2)	11

（主審 岡村）

大阪は慎重なスタート。技術、コンビともにすぐれ、ミスもほとんど見られず大差をつけた。一方の岩手は増田が7点を挙げ、わずかに面目を保った。

▽準決勝

大阪イーグルス 33（15－9、18－4）13 富山教員

得	【大阪】		【富山】	得
0	奥浜	GK	上田	0
0	島崎	GK	宮田	0
4	東	FP	原田	2
3	井上	FP	永見	4
5	青木	FP	秋元	2
0	北岡	FP	中山	1
1	加藤	FP	古木	1
3	松尾	FP	安平	1
4	木村	FP	旅	0
9	福井	FP	越前	0
4	樫塚	FP	金原	2
33	(1)	7MT	(0)	13

（主審 日野）

富山は開始直後はよく大阪に食い下り善戦。サイド攻撃が主体で得点をあげる。しだいにイーグルスのペースになり、もち味を生かした多彩な攻撃を発揮し、決勝に進出を決める。

埼玉教員 20（10—7、10—8）15 福井教員

【福井】	得		【埼玉】	得
GK 越田	0		GK 高橋	0
GK 竹田	0		GK 上久保	0
FP 華立	1		FP 金子	0
FP 竹野	1		FP 三枝	1
FP 森下	1		FP 松田	1
FP 塚崎	0		FP 北井	6
FP 鶴野	0		FP 多勢	0
FP 坂野	4		FP 結城	5
FP 小谷内	2		FP 高戸	1
FP 福田	0		FP 高田	6
FP 田島	6			
15（1）7MT			20（4）7MT	

（主審 岡前）

福井は埼玉のゲッター北井をマークしたが、それが不十分であったため得点を許したのが第一の敗因となった。福井は埼玉のディフェンスの穴をよくつき、おいこんだが、北井のマークの甘さで許した得点を返すに至らなかった。

▽決勝戦

大阪イーグルス 18（10—8、8—6）14 埼玉教員

【埼玉】	得		【大阪】	得
GK 高橋	0		GK 奥浜	0
GK 上久保	0		GK 島崎	0
FP 金子	0		FP 東	2
FP 三枝	0		FP 井上	4
FP 松田	1		FP 青木	5
FP 北井	5		FP 北岡	0
FP 多勢	0		FP 加藤	1
FP 結城	3		FP 木村	0
FP 高戸	0		FP 松尾	0
FP 高田	5		FP 福井	5
			FP 樫塚	1
14（1）7MT			18（2）7MT	

（主審 岡田）

ここ数年、教員界を分けている両チームの対戦となり、教職員優勝の勢いで埼玉の二冠なるかという点に興味がもたれた。大阪はこの大会慎重な試合運び。この試合を大阪はブロックプレーを多用して、それを得点に結びつけ、教職員の雪じょくをとげた。

▽三位決定戦

福井教員 28（17—7、11—5）12 富山教員

三位決定戦にありがちな元気のない試合であった。福井は富山のミスに乗じ、速攻をかけ、点差を開き、見事に三位を獲得した。

富山は中央にボールを集め、そこから狙うといった動きだったが自滅した。

天皇杯順位 ①熊本、②埼玉、③福井、④静岡、⑤愛媛、大阪、⑦岩手、⑧神奈川、北海道、⑩兵庫、三重、東京

第23回国民体育大会秋季大会 ハンドボール競技総評

審判長 嶋田新太郎

一般男子では、大崎電気・住友化学・KK三景のシードチームは順調に勝ち進み、全神奈川は実業団の新鋭常盤工業に惜敗した。決勝は大崎電気とKK三景、昨年の埼玉団体の時と同じ顔合せとなった。KK三景は尾形をGKに戻して緒戦から必勝の構えで勝ち進んできた勢いをこの決勝戦に遺感なく発揮し、積極的に攻め、随所に好プレーを見せたが、大崎電気は除々にピッチをあげ決勝戦にふさわしい大接戦を演じ大崎電気の8連勝で終った。両軍GK福本、尾形共によく試合が一層引立ってよかった。

住友化学菊本が加藤・GK季原が外傷によって欠場したが、よく面目を保って敢斗したことはほめてよい。

一般女子は田村紡績「三菱鉛筆、大崎電気、大洋デパートの4強の争いとなり、クラブチームは大差で敗れ、決勝は、大洋—田村紡の間で行われ、天覧試合とも思われない活溌な試合が展開された。大洋デパートは田村紡の立上がりを強く攻めてリードを奪い、後半立直りを見せた田村紡のペースもGKの好守により阻止され、日頃見せてくれたリターンパスや鋭い切込みが見られず太洋デパートに屈した、太洋デパートは三回目の優勝を遂げた。

教員男子は予想通り大阪イーグルスと埼玉教員クラブの間で、決勝三回目の対戦となった。過去一勝一敗のあとをうけて、一進一退のシーソーゲームを展開したが、大阪はソツのない攻撃でリードで緊迫の中にも余祐のある試合を見せて5回目の優勝で3連勝した。

高校男子は、本年より混合チームが認められ単独チームと混成チームの比較が焦点となる試合でもあった。たまたま今大会で10チーム中単独チーム5、混成チーム5であったが、結局インターハイの覇者下関中央が新居浜工業に敗れる番狂わせがあり、兵庫選抜、全静岡の混成選抜チームの対戦となった、両チーム共に単独単発シュートによる得点が大半でセットプレーが全く見られず、試合内容には見るべきものが少かった。しかし延長に延長を重ね決勝戦にふさわしい熱戦が展開されて全静岡が初優勝をしたわけであるが、混合チームづくりにも今後の課題があるように思われる。

高校女子では、男子と同じく単独、選抜の比率は同じく5対5であったが、インターハイに抜群の強さを発揮した菊池農高が危なげなく地力を発揮して4度目の優勝をした。

一般では、クラブチームと実業団、高校では単独と混成がこの大会における見どころで今後の進め方に注目していかなければならないのではなかろうか。

地元福井県チームは、各種別に大いに頑張り教員、高男の3位、一般男子の健斗で綜合3位を獲得されたことは賞讃してもよい。

又この大会全般を省みて、競技場の整備は万全を期され、3日目の雨天の際は、高浜町、青郷小体育館の2会場で、なんらの支障なく運営できたことは大変よかった。

第4日目にはハンドボールとしては4度目の天皇皇后陛下のご台臨をいただいたことは地元高浜町はもとより関係者としては誠によかった。

終始この大会に采配をふられた浜田町長、実行委員長の小見山助役その他の各役員の皆様方の努力には敬意を表したい。

又競技役員は今までになく熱心で、多少問題があるかも知れないが、決勝戦までゴールジャッジをしてもらったことはよかった。

しかし、国体が都道府県対抗であるために、県役員、監督、選手が異状な興奮状態に陥いることはわかるが、ベンチにおける発言にも限度があるのではないか、特に判定についての不服をいろいろな表現で示す監督が多いのが目立った。

尚教員決勝における両ベンチの発言は限度を越えて残念であった。

いづれにせよフェアープレーの精神を発揮するこのゲームで役員も同じ気持ちで参加することが必要でなかろうか。

チヨダは印刷機材の合理化を推進する総合メーカーです。


営業二課／栗田満夫

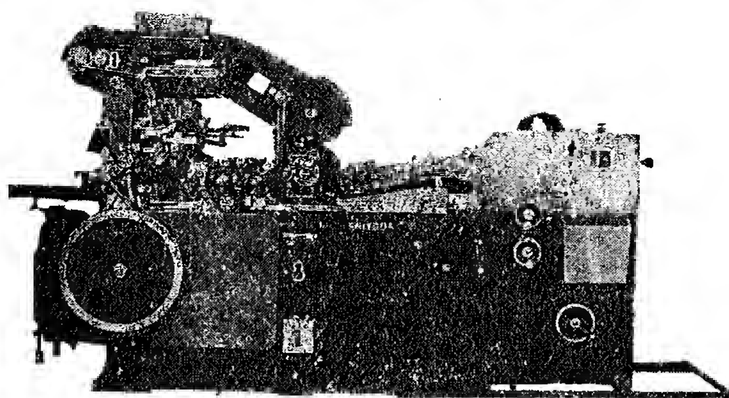
パーフェクトは夢の印刷機（全自動）です。
超薄紙から厚紙まで、忙しい人手の足りない工場に大好評。


営業一課／庄司政雄


営業三課／打林行夫

パーフェクトはたくさんの賞賛の言葉をいただきました。
よい製品をつくる励みになります。


本社新社屋

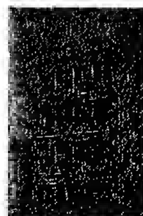


新製品 **パーフェクト** 全自動B四截凸版印刷機

8

千代田印刷機製造株式会社
千代田印刷材料製造株式会社

本社	東京都千代田区神田猿楽町1－4　TEL 東京(292) 2011（代）～8
横浜支社	横浜市西区高島通り1－7　TEL神奈川(045) 44－6572・7358・7028
福岡支社	福岡市御供所町3番16号（聖福寺前）　TEL 福岡(28) 3960・0153
立川工場	東京都昭島市東町1丁目1番地5号　TEL 立川(0425) 2－2470・4383
九州工場	佐賀県小城郡牛津町（牛津駅前）　TEL 牛津 72


横浜支社

臨時評議員会、理事会

10月4日・2日福井県高浜町

理事会

臨時理事会は43年10月2日16時30分から高浜町「余米」で3時間にわたって開かれたが、出席者が定足数に満たないため、話し合いの会とした。

まず総務局から各大会の成績、IHF総会、世界選手権大会について報告があり了承された。

ついで事業局から、企画委員会の基本方針について説明、中学校指導要領についての説明、渉外部の報告がなされた。

競技局からは審判部、技術部、普及部についての報告がなされ、了承された。

JOC委員会の報告があったが主題はユニバシアード、オリンピック関係のことであった。

国体委員会の報告は、第26回(昭和46年度)国体が和歌山県に決定したことなどが報告された。

競技力向上委員会からの報告は今年度予算などについてであった。

次いで予定されていた協議事項に入り、42年度試算表(別掲)が了承された。

44年度行事予定に関連して、全日本教職員連盟を設立したい希望が出された。

行事日程は完全に決定されてはいないが、いずれ全面的に決定されることになる。

評議員会

ついで臨時評議員会が43年10月4日午後4時40分から2時間にわたって、高浜町「余米」で開かれた。この評議員会も定足数に達っせず、種々の問題について、討論されるにとどまった。

まず、ソ連が開催して行なわれる国際女子ハンドボール選手権大会について、種々の論議がかわされたが、種々検討すべき事項が多いので、その検討事項を解決してから決定することになった。

来年度の国際試合は種々の情勢がかわり、未だ検討すべき問題が多いので、次回に決定することとし、今回は保留とされた。

体協評議員には、西副会長が推薦された。

鈴木前会長を協会顧問に推薦する意向も示された。

また数原洋二、徳永陸繁両理事の辞任と田中滋章、久田暁両氏を理事に推薦することも話しあわれた。

社団法人化についても、準備委を中心にして推進することが申し合わされた。

以上の事項は出席評議員の間では、一応の了解点に達っしているが、なお正式の決定にはなっていない。

全国理事長会議開かる

10月2日高浜町

ここのところ恒例となっている国体時の全国理事長会議が今年も国体開催地である福井県高浜町「余米」に於いて、10月2日に開催された。

現今、内外ともに種々の困難な問題が山積している時に当り、種々の問題について積極的な意見が交換された。

直接、日本のハンドボール界の執行に当っている日本協会と現場の第一線の細い指導に当っている県協会の理事長との間に小さいことでも、誤解や意志の疏通を欠くことがあってはいけない。

また日本協会の施策の中に、地方の声をもりこみ、それを基にした立案をしなければいけない。

また地方協会では、日本協会が何故このようなことをするのか十分に理解し、その方針を十二分に理解した上でないと、どのようにしていったらよいか判らない場合も出てくることもあろう。

そういうことのないように、太く、速度の速いパイプが通っていることは必要である。

そういった意味において、この全国理事長会議はそこに集った諸氏が一緒に食事をしながら、ザックバランに腹を見せあった話ができるというので、大いに効果をあげている。

それだけではない。各地に於ける種々の難問を互いの体験を語りあいながら、互いに解決できるという利点をもっている。

一年に一度こうした会合がもたれて、親交を深めることは大いに良い結果になることだろう。

この集りが現在のような形で続き、日頃思っていることをどしどしフランクに話し合える機会をもてることは、ハンドボール界の今後にとって、大いにプラスになることだろう。

来年は今年より多くの人々が集れるように願ってやまない。

出席者名簿(敬称略)

北海道協会理事長岡田豊夫、岩手県協会常任理事太田利彦、佐々木茂喜、福島県協会理事関川正道、埼玉県協会常任理事遠藤健次、東京都協会理事長佐野和夫、長野県協会常任理事加藤雅之、静岡県協会理事長片瀬喜代治、岐阜県協会理事長高井勝勇、福井県協会長伊藤仁和、同副会長関捨男、同理事長中村九郎右衛門、同常任理事西島喜代治、東哲郎、石川県協会理事長若山博、富山県協会常任理事桶家寛、三重県協会理事長中根武彦、京都協会理事岩本定男、奈良県協会常任理事久保田広次、和歌山県協会常任理事山田進、広島県協会常任理事平田幸男、山口県協会理事安部宥二、愛媛県協会常任理事河本武夫、福岡県協会常任理事日野博、熊本県協会理事長藤田八郎、長崎県協会理事長松村守、日本協会荒川清美理事長、山田計・久田暁・浜田猪三郎・田中滋章・岡村昭二常務理事

42年度収支計算書

総合貸借対照表

昭和43年3月31日

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	11.423	仮受金	1.110.685
当座預金	3.539.201	(一般会計)	(95.085)
振替貯金	896.865	(機関誌会計)	(1.015.600)
定期貯金	4.479.206	未払金	120.000
(銀行)	(479.206)	(国際大会会計)	(120.000)
(郵便局)	(4.000.000)	預り金	806.643
未収入金	(1.669.155)	(一般会計)	(806.643)
(一般会計)	(252.800)	後期繰越金	10.140.092
(機関誌会計)	(344.000)	(一般会計	9.191.337)
(オリンピック基金会計)	(3.600)	(全日本会計	1.062)
(対全日本会計)	(1.062)	(国際大会会計	947.693)
(国際大会会計)	(1.067.693)		
後納保証金	50.000		
仮払金	1.531.570		
(一般会計)	(1.531.570)		
合計	12.177.420	合計	12.177.420

総合収支計算書

昭和43年3月31日

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
一般会計	6.396.227	一般会計	6.330.170
機関誌会計	2.688.749	機関誌会計	2.309.500
対全日本会計	977.338	対全日本会計	978.400
国際大会会計	7.778.307	国際大会会計	8.726.000
小計	17.840.621		
当期収支差額	503.449		
(一般会計	△ 445.306)		
(国際大会会計	947.693)		
(対全日本会計	1.062)		
合計	18.344.070	合計	18.344.070

(機関誌会計) 収支計算書

昭和42年度 (自昭和42. 4. 1 至昭和43. 3. 31)

支出の部		収入の部	
印刷費	1.811.006	購読料	1.859.500
編集取材費	320.220	広告料	450.000
人件費	331.020		
通信費	145.374		
消耗品費	13.099		
印刷費	51.700		
旅費交通費	13.280		
予備費	3.050		
計	2.688.749	計	2.309.500
		収支差額	379.249
合計	2.688.749	合計	2.688.749

(一般会計) 収支計算書

昭和42年度 (自昭和42. 4. 1 至昭和43. 3. 31)

支出の部		収入の部	
1 (会議費) 総務193.240 財務6.770		オリンピック基金	125.000
審判81.640 技術25.341 普及16.810	323.801	加盟金	370.000
2 (渉外費)	86.159	登録金	1.379.600
3 (旅費交通費) 役員 71.970 財務 13.740		大会参加料	319.000
技術154.684 総務152.620		検定料	1.035.000
審判166.020 普及168.940	727.934	審査料	242.000
4 (通信費) 総務	421.523	ルールブック	8.500
5 (分担金) 総務 62.000 渉外218.642	280.642	補助金	
6 (印刷費) 総務	168.800	競技力向上 1.740.000	
7 (大会講費) 総務 30.004 技術772.020		振興金 600.000	
普及 92.440	894.464	国体旅費 318.840	2.658.840
8 (消耗品) 総務 48.137 審判134.000	182.137	雑収入	192.230
9 (備品費)	15.450		
10 (人件費)	450.800		
11 (賃借料)	480.000		
12 (予備費) 役員 29.880 総務 85.806			
技術 2.050	117.736		
計	4.149.446		
(補助金) 全日本高校選手権	150.000		
〃 学生 〃	150.000		
〃 総合 〃	100.000		
〃 選抜 〃	100.000		
国体補助金	300.000		
計	800.000		
(予備費)	1.229.781		
(大会参加料)	217.000		
計	6.396.227	計	6.330.170
		収支差引	66.057
合計	6.396.227		6.396.227

ＩＨＦ総会に出席して

荒井清美

西ドイツの印象

私は8月17日から9月7日の約20日間、ＩＨＦ総会に出席し、あわせて、ヨーロッパ特に西ドイツのハンドボール界の情況を視察するため、渡欧しました。

8月17日夜、ＪＡＬに乗りこみ18日朝には、もうヨーロッパ、まつすぐにケルンに行きました。まず西ドイツのケルン郊外にあるケルン体育大学に行き、ここでは、学長、生理学の教授などに会い、生理学的、体育学的な問題に関して、意見を交換し、合わせて、施設を見学させてもらいました。

このケルンに基地を置いて会議前に西ドイツの各地にいきました。

中でも印象深いのはデュッセルドルフで、ドイツ協会をたずねた時のことです。このことは後に触れます。

ドイツ協会に行きますと、デュッセルドルフ近郊で、西ドイツ女子ナショナルチームが今冬のモスクワでの選手権に出場するため、合宿練習をやっているという話なので、それを見学しました。

このようにして、会議前のドイツ滞在中は、大学を訪れ、種々の施設の見学・あちらの専門家との話しあい、ドイツハンドボール協会を訪れるといったことで多いに有効に日を過しました。

中部ドイツの穏やかな晩夏の風景の中で行なわれている牧歌的な合宿、緑の多い広いキャンパスの中に点在する校舎ときれいにならされたアンツーカー、あるいは芝生のグランド、整った学生寮の施設、広い研究室などどれをとつて見ても非常にうらやましいものでした。

ケルンから汽車に乗り、広いドイツの平原の中を旅し、ラインの流れなぞを見ながら、ヨーロッパというのは実に広いが、のつぺりしたものだなあと実感として、その広大さと平らさを味いました。アムステルダムにつき、宿舎に入りました。

総会前の雰囲気

総会は30日にアムステルダムのホテルの中にある小会議場で行なわれました。

会議前日から、チェコ問題がからんでしょうが、慌ただしい動きが見られ、ホテルのあちこちで、三々五々集り行なわれているのが見かけられました。

普通ですと、しごく和やかな雰囲気であり、旧交を暖めあう風景があちこちに見られると聞いていましたが、今度の場合はやや異っているようでした。

ソ連とも69年の招待の件で話しあいたいと思っていたので、29日に会いたいといったところ、大変忙しそうで、明日の会議をおわってからにしてくれとのことでした。

会議の日になり、会議の始る前にも、ヒソヒソとあちこちに数ヶ国の代表が集り、密議をこらしているといった風景が見られました。

総会の内容

果して、会議の始め、ごく儀礼的な挨拶をすることが当り前になっている開催国オランダの会長が大変重大な会議である。今回の異常事態のため、大変重要な決定をしなければならないので、そのつもりで会議に臨んでほしいとの挨拶があり、会場は重苦しい雰囲気につつまれました。

次にＩＨＦ会長のバウマン氏がたち、挨拶をし、その中でソ連に於ける第4回女子世界選手権を中止すると昨日の理事会で決定されている。これをまずやりたいといって、論題に入った訳で、その後は御承知の通り、中止が13：12で決定され、すぐにヨーロッパ杯の中止も上呈され、可決されたのです。その後は通常の総会の通り、議事が進み、人事は現執行部の全員留任。ついで各国の提案に入り、競技場を主要国際試合では40ｍ×20ｍにすること、ジュニアの年令の統一、複審制の問題、1チームの構成を12名にするなどの提案が討議、決定されました。

その後、今後の会議、選手権の議題に入りました。

1969年の国際審判員講習会はスペインで行なうことがまず決定されました。

ついて1970年の総会をスウェーデンで開催することが決り、1970年の男子世界選手権がフランスで行なわれ、細部にわたる再確認がありました。

女子の世界選手権は次回は70年になるのですが、これに関してはオリンピック問題がはっきりする1970年の総会まで保留することになりました。

ミュンヘンオリンピックについては、一応男子16チームとして、1970年の世界選手権で8チームをあとの8チームはアジア、アフリカ、アメリカから1チームずつ、あとはＩＨＦで決定するという線が出されました。

1974年の男子世界選手権はドイツが立候補しているが、70年の総会で決定することにして、保留となりました。

会議は30日だけでおわり、31日はアムステルダムの市内の観光を行ない、解散しました。

その後、ミュンヘン・オリンピックの施設を見学するためミュンヘンに行き、そこから帰国の途についた訳です。

以上が会議の内容を主とした私の今回の旅行のあらましですが、次に今度感じた種々のことについて触れておきたいと思います。

総会の印象

ＩＨＦ総会では、初めに、すでに皆さんも御承知のとおりの「チェコ問題にからんで起きた世界選手権中止議案」が提案された訳ですが、これが御承知のとおりの事情になったことは選手諸君をはじめとする関係者諸氏には誠に気の毒なことではありますが、やむを得ないと考える次第です。

この時にも感じたのですが、よく最近云われている国際連盟の執行部と新興国間のミゾといったよ

うなものをチョットではありますが感じたような気がします。

秘密投票でしたので、よくは判りませんが、なんとなしのふんいきからいいますと、西欧諸国は執行部案に賛意を表し、ソ連をはじめとするアフリカ新興国は執行部案に反対、すなわち開催しようという意向のように見受けられました。

執行部の指導性

この時にも感じたのですが、この後の議案の処理の際に特に強く感じたのは、執行部の指導性の強さとそれからくる会議の運び方の速さということでした。

執行部―特に会長―の発言権の強さには眼を見張るものがあり、たとえば、英国の加盟の可否が問われた時、プチ・モンゴベール副会長が英国をかばう演説をながながしようとしているのを、バウマン会長がとどめ、裁可してしまい次回延しにするといった場面で特に強く感じました。

11人制の存続といったような重要案件に関しても、技術委員長よりも、会長がはるかに指導力を発揮し、決定するというように。

人事の面でも、会長の留任が決定すると、会長が他の役員をミュンヘンオリンピックまでこの組織でという一括提案でそのまま認めさせるというように、執行部のイニシアテブは非常に大きなものがあり、会議の進行はすこぶるスピーデイなものでした。

こういったことは一つには、常務理事会、理事会ですでに検討しつくされているので、自信をもつて、会議に臨む態度もしつかりしており、理事全員、そして理事を選出している国々がこぞってこれを支持するという事が強力な指導力をもつ背景になっていることも見逃せないことだと思います。

このような会議に入る前にすでに大体の話は型がついているため日本のようにごくときおりしか、これらの人々と話う会う機会のない国が新しい提案をしたり、役員になったりしようとすることは至難のワザということができましよう。

今回も理事国立候補の意志表示はしたのですが、ヨーロッパにそれこそ真の意味での知己がいない現状では、全く話にならないというのが、今回の総会に出て痛感したところです。

オリンピック問題

オリンピック問題にしても、男女開催が可能かどうかは現在行なわれているメキシコ・オリンピックの際に行なわれるIOC総会でメドがつくことになりましよう。

これも、やはりIHFと開催国である西ドイツがどの程度政治力を発揮することができるかが、一つのカギになりましよう。

ドイツ協会が中心になって。ドイツ体育協会長がバックアップしメキシコのIOC総会には、ドイツ体育協会長を先頭にして、ドイツハンドボール協会長、IHFのドイツ出身の技術委員であるジーグフリード・ペライ氏が出かけていくという話でしたので、かなりの成果があがることが期待できるでしよう。

オリンピックに対する各国の関心に非常に高いものがあり、これは役員の留任をミュンヘンに理由づけて行なったIHF執行部と同様に大変なものがあることが、ひしひしと感じられました。

総会でも、男女開催の声が非常に高く、各国ともただならぬ関心をよせていることは、オリンピックが議題になった時会場にみなぎった、熱っぽい雰囲気からも察つすることができましたし、各国の代表と意見を交換していてもオリンピックと云う言葉はしばしば聞かれました。

ドイツ協会の印象

オリンピックと関連して、ドイツ協会ですが、ここは一つの立派な事務機構がそなわっています。

会長、副会長が絶対の権力をもっていることはすごいものですが理事長が協会専属であること、役員は事務所の近くに居を構えていてすぐにもかけつけられるといったらやましい条件にあります。

西ドイツの大所帯をひきいているのですから無理ないと思いますが、試に立派なものです。まさに組織があるという感を受けました。種々の面で学ぶことは多々あります。日本でも一つ一つ解決し、あらゆる面でトップレベルになりたいものです。（談文責・編集部）

従来行なわれたＩＨＦ総会

	開催年	開催地
第1回	1946年	コペンハーゲン（デンマーク）8ケ国参加
第2回	1948年	パリ（フランス）11ケ国参加
第3回	1950年	ウイン（オーストリー）13ケ国参加
第4回	1952年	ザールブリヨツケン（西ドイツ）16ケ国参加
第5回	1954年	ヤパチーヤ（ユーゴー）15ケ国参加
第6回	1956年	ストツクホルム（スウェーデン）18ケ国参加
第7回	1958年	ガルミツシユ・パルテンキルヘン（西ドイツ）17ケ国参加
第8回	1960年	リェーシュ（ベルギー）21ケ国参加
第9回	1962年	マドリッド（スペイン）24ケ国参加
第10回	1964年	ブダペスト（ハンガリー）25ケ国参加
第11回	1966年	コペンハーゲン（デンマーク）26ケ国参加
第12回	1968年	アムステルダム（オランダ）28ケ国参加
臨時総会		
	1948年	パリ（フランス）14ケ国参加

ネデフ氏から学んだもの

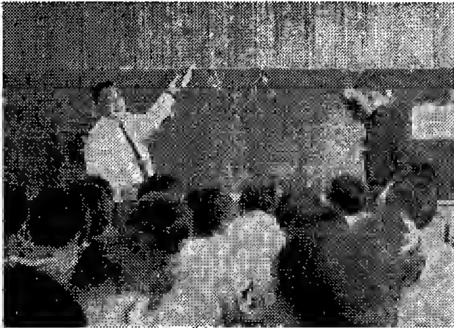
大崎電気女子監督　宮原俊隆

私達は嘗てルーマニア男女が世界制覇をし、世界の最上位のナショナルチームのコーチであるネデフ氏から指導を受け学びました。基本技術、基礎体力の重要性を改めて身を持って教わりました。選手達がネデフ氏から直接指導を受けた体験は誠に意義深いものがあります。

基本技術は始めてハンドボールをやる人も全日本選手でも同じ様にいつも反復練習をしなくてはいけない。一流選手になると思ったら見よう見まねではなく正しいコーチを受けて正確な基本技術、基礎体力を順序よく反復練習をしなければならないということです。

ネデフ氏の指導を受けた印象

練習は厳しいが楽しさがある。プレーヤーは基本技術、基礎体力に忠実であれ、練習は常に「正しく、速く、強く」、練習、内容、目的を分かりやすく理解させる。選手はいつも頭を使ってプレーし努力することだ、コーチがやって見せる（言葉は通じないが、見てわかる）練習に変化があると同じに能率的な練習である。練習には目新しい練習法や理論はありませんが、練習方法や気付いた点を書いて見ます。



1、練習に補助運動、補強運動を多く取り入れる。

体力作りとして特に、足の力、腕の力、腹筋を補強する

Ⓐ瞬発力をつける運動

例、イ、一人がしゃがみ他のひとりは両足でジャンプして飛びこしすぐ腹の下をはい出す。

ロ、シャドウボクシング2人向い合い動きながら手や足を動かす。

ハ、ファイティングフック2人向い合ってジャンプ。ジャンプの頂点で胸と胸を合せる。

Ⓑ筋力を強くする運動

例、イ、うさぎとび、2人で向い合ってうさぎとびをしながら手と手を合せて相手を倒す。

ロ、腹筋、2人一組で向い合って坐る相手の手首を持って寝る。

ハ、すもう、2人で押し合う。

ニ、逆立ちの腕立けんすい2人1組で一人が逆立ちをして他のひとりは逆立ちした人の足を肩にかけすぐこの姿勢から腕を曲げ伸ばしする。

2、出来るだけ多くボールを使う練習

練習時間は限られているから、ひとりが出来るだけ多くボールにさわる様にしなければいけない。又出来るだけボールになれる事ひとり1個少くなくとも2人に1個の割合でボールを用意する。練習の始めに決りきったように整列、円になって徒手体操をしなくてもボールを使って手や足を動かし、2人一組でボールを使って体操をするとか（例）背と背を合せて立ちボールを両手で頭上で渡し次に両足の間から渡す。前後運動、ボールを片手で握りまわす。整理運動としてスローインこの練習をする事も出来る。ドリブルで1対1の奪い合い、ボールをコロガシ走るパスでも二人でボールを2個3人で2～3個使ってパス、キャッチの練習をする事によって視野が広くなる。

3、インターバル練習

常に激しい練習と軽い練習を組合せなければならない。試合でも激しく動くとき、軽く動くときがインターバルになっているから1日の練習中で激しくやるとき、軽くやるとき又1週間の練習でも同じ様な考えてやる必要がある。

練習でもランニングだけではなく、パス、フットワーク、コンビネーション等にもインターバル練習をする。（例）パスの場合、1分間早いパス30秒休み3回とか、フットワーク30秒休み30秒2回

4、パスとキャッチの重要性

ネデフ氏に一番うるさく言われたのがパスとキャッチである。いつもグランドで大声で「正しく、速く、強く」特に正確なパスキャッチを要求された。パスキャッチに毎日かなり時間をかけて練習した。

練習も3段階に分けて

a　基礎練習―静止した状態での練習、力を入れず正確なフォームを身につける。

b　応用練習―動きながらランニングを加えて早く強く。

c　実戦的練習―相手をつけての練習試合と同じ様に、練習は3段階に順序を追って教えてもらい完全に出来なければ次に移る事が出来ないのではなく、実戦的練習をしてどうもうまく出来ない場合には応用、基礎練習にもどって練習をする。

5、ディフェンスの強化

ディフェンスの基本的な原則をプレーヤーは忠実に守ってディフェンスの練習を積むことである。フットワークに重点を置き毎日の練習で必ずやった。特に注意された事は両手を有効に使い両手を広げ上下に振るフットワークは常に前後左右に動く。指導者の指示を見て動く（常に相手の動作を見て動く事）ディフェンスは決してリラックスしてはいけない。オフェンスから切りかえを出来るだけ早くすることが常に大切である。ディフェンスのつめを早くする。

6、メジシンボールを使用（ハンドボールの大きさ重さ1kg）

既製品でなければいけない事はない、破れて使えなくなったボールの中にぼろきれをつめこめば、かなり重いものが出来る。日本人は特に腕力が弱いのでメジシンボールを使って練習する必要があ

る。練習したのはパス、キャッチ2〜3m位で正確に早く行う。すぐ軽いボールでパスキャッチをくりかえすとか、重いボールと軽いボール一諸に使ってパスする。重いボールで片手キャッチ、チェンヂンパス、etc重いボールを使う前に必ず補助運動で手首や肩などを良く動かしてから使うこと。重いボールでシュートを打たない様に肩をこわすから。

7、グループ形式、ゲーム形式の練習

3人、4人、とグループを作ってパス、ボールカット・ディフェンス練習、サッカー、バスケット、ホッケー、ラクビ等をやり体をならしながら基本技術や基本戦術の練習を兼る事が出来る。ウオーミングアップの一環として特にやる事が多い。

8、特に男女の練習方法は同じである。

強いて言えば女子の場合には足の力、腕の力、腹筋瞬発力にかけているのでこの点を主眼に置いて練習して行くべきだ。ランニングの時に出来るだけスタンスを広くして走る様に注意を受けた。

最後に練習と試合は出来るだけ並行して行う様に試合の中から何を練習しなければならないかを見つけまた練習での技術がどれだけ、試合に出来るか、又試合そのものがさらに高い段階に進むための一種の練習でもある。どんな実戦的な練習でも身につけることの出来ないものが試合の経験で得られる練習は試合の代わりにはならない、出来るだけ多くの試合をやる様に強い相手との試合経験をたくさん積なければいけない。

皆様方に連絡の不手際で大変御迷惑をお掛け致しました事を誌面を借りて深くお詫び致します。



練習を一緒にするネデフ氏（中央やや左より）

大崎電気男子監督　竹野奉昭

一口に言ってハンドボールの初歩の初歩であり、私達が日頃先生、諸先輩方に口が酸っぱくなるほど言われた、パス、キャッチと合理的な練習の流れであると思う。

一ヶ月の間に多くのことを指導して戴く為ネデフ氏には大変なことであるが、一日三時間を御願いした。二時間は基礎体力、基本技術の反復練習、残り一時間はオフェンス、ディフェンスの練習であった。そして私達の旧式の練習にこだわらず、ネデフ氏のスケジュールに一任した事が良かったと思う。

歩行練習に始まり春先を思い出させる柔軟体操、腹筋運動、腕立伏せ、兎跳等の基礎体力を選手を楽しませながら鍛えて行きボールを使っては面白いゲームをさせ、息を抜く場を作ったりし、又やる時は徹底的にしぼられた感がある。又ボールテクニックの養成の為、片手キャッチ、バックパス（上・下）等、私達日本選手が考えもつかないような難しい、いろいろなテクニックを実際に指導を受け、頭の中では「こんなこと」と思いながらやっているうちに、思うところにボールを投げれる様になった事は喜ばしいことである。

「サーカスの綱渡りでも毎日の練習で高等技術を身につける。ハンドボールも同じ事である。」とはネデフ氏の言葉である。この様な難しいテクニックを教えながら、パス、キャッチは正しい姿勢で正確なスローを強調された。何か矛盾を感じるがよく考えると味のあることである。ボールを自由自在に扱ってこそ、正しい正確なパス、キャッチが出来る様になると思う。

ルーマニアのナショナルチームの合宿の仕上げでは三日間パス、キャッチの練習で終る事もあるそうである。

選手一人一人が基礎体力、基本技術を身につけディフェンス・オフェンスにおいて二人、三人……のコンビが完成されてこそ、始めて七人のコンビが組めれるのではないだろうか。

〃何を学んだか〃と言っても同じハンドボールをやっているので目新しい技術、練習方法はあまりなかったが、世界制覇を何度もなしとげたルーマニアのコーチの言葉だけに真実性があり、前述べたとおり基礎体力、基本技術の重要性を痛感するのである。これは余談ではあるが、日本では攻撃は最大の防禦であると古い諺があるが、ネデフ氏は『防禦は一番緊張する時であり攻撃は休憩である。』の言葉を私達は今一度考える必要がある。

何かまとまりのないことを書いてしまったが、ネデフ氏の来日にあたり多くの人達に直接参加して指導を受けて戴くことを希望していましたが、はじめての外国人コーチの招聘で私自身何も手がつかないまま終ってしまい、多くの方々に御迷惑をかけたことを紙面を借り御詫致します。

☆☆☆☆☆☆☆ 海外トピックス

藤本　強

ダイナモ・ブカレスト ダイナモ・ベルリンを敗る！

——東ベルリン——

過日、東ベルリンで行なわれた7人制ハンドボールの試合で、ルーマニアの強チーム、ダイナモ・ブカレストと東ドイツのトップチーム、ダイナモ・ベルリンが対した。両チームとも世界的に名の知られた強豪チームである。

試合は親善試合として行なわれた。

ルーマニアのブカレストが快調に最初からとばして、リードを奪い前半は10—7とリードしたが、東ドイツのダイナモは後半良く追いこんだが、ゴールキーパー、ペヌの活躍があり、ついに及ばなかった。東ドイツの反撃をよく押さえたダイナモ・ブカレストのキーパーペヌと一人良く7点をあげ、ダイナモ・ブカレストに勝利をもたらす原動力となったリスがこの試合の立役者であった。

ダイナモ・ブカレスト（ルーマニア）　18（10—7／8—9）16　ダイナモ・ベルリン（東ドイツ）

親善杯男子はハンガリー 女子はルーマニア

これは16才から18才の選手によって争われるもので、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴースラビア、ブルガリアの東欧四ケ国が参加して、本年は男子は西ハンガリーのモゾンマジャーロバルトで、女子は東ハンガリーのベケクサバで試合が行なわれた。どちらもリーグ戦で行なわれた。

結果は次の通り

ルーマニア　20—16　ユーゴースラビア
ハンガリー　32—12　ブルガリア
ユーゴースラビア　25—18　ブルガリア
ハンガリー　16—15　ルーマニア
ルーマニア　27—18　ブルガリア
ハンガリー　20—18　ユーゴースラビア

ハンガリーとルーマニアはほぼ同じ力を示したが、わずかにハンガリーがルーマニアを押え優勝した。

ユーゴースラビアもハンガリールーマニアに勝るとも劣らない力をもっていたが、今一つの力不足で三位におわった。

ブルガリアはちょっと力がおちるようであった。

女子の結果は次の通り、

ブルガリア　9—8　ハンガリー
ユーゴースラビア　6—6（引分）　ルーマニア
ユーゴースラビア　16—2　ブルガリア
ルーマニア　11—10　ハンガリー
ルーマニア　21—6　ブルガリア
ハンガリー　7—7（引分）　ユーゴースラビア

勝ったり、負けたり、引き分けたりで、全くどこが勝つか判らない展開となった。ハンガリーが力を持ちながら、ブルガリアにとりこぼすという大きな番狂せがあり、無事にハンガリー戦とユーゴースラビア戦を戦いぬいたルーマニアの優勝となった。

数年後にはナショナルチームの一員になるであろうこれら若い力の対戦にはすこぶる興味があると同時に、我が国の高校生諸君にもこうした檜舞台が作られることが一日も早いことを望みたい。

こういった形の大会、ジュニア・ナショナルの大会、ナショナルチーム同士の斗いと各種大会が豊富にあるヨーロッパ諸国を実にうらやましく思うのは筆者一人ではあるまい。

（男子）	試	勝	分	敗	得失	勝点
ハンガリー	3	3	0	0	68:45	6:0
ルーマニア	3	2	0	1	62:50	4:2
ユーゴー	3	1	0	2	59:58	2:4
ブルガリア	3	0	0	3	48:84	0:6
（女子）						
ルーマニア	3	2	1	0	38:22	5:1
ユーゴー	3	1	2	0	28:15	4:2
ブルガリア	3	1	0	2	15:43	2:4
ハンガリー	3	0	1	2	23:25	1:5

ハンガリー球界一九六八年

ここは男子14チーム、女子14チームによって、春から秋にかけての二回戦制の国内リーグを行なっている。各チーム26試合を行い、優勝を争うという形をとっている。

折り返し点では、常勝、ホンブット・ブタペストが11勝1分1敗の好成績で男子のトップにたっている。二位のベーレー・メテオール・ブタペストが8勝1分4敗、三位のバニャスズ・ペスシがやは8勝1分4敗と差が大きく開いているので、今シーズンも男子は名門、ホンブット・ブタペストが栄冠を掌中にする可能性がきわめて強い。男子14チームの内容は現在ホンブット・ブタペスト、ベーレース・メラオル・ブタペスト、バニャスズ・ペスシ、ドズナ・ウジュペスチ、ETO・ギョリ、テクスタイレス・ギョリ、エレクトロモス・ブタペスト、TFSE・ブタペスト、スパルタクス・ブタペスト、バザス・ブタペスト、スセペル・ブタペスト、ドズナ・ペスシ、コハス・オジー、クセーメール・KCとなっていて、ブタペストのチームが多いことが注目される。

女子は現在のところヘレンスバロース・ブタペストが12勝1敗、バザス・ベスップレミが11勝1分1敗で激しく首位を争っている。女子のチームは前記2チームのほかにコハス・オジー、ペスシ・バニャスズ、テクスタイレス・ギョエリ、バザス・ブタペスト、スパルタクス・ブタペスト、スセペル・ブタペスト、TFSE・ブタペスト、ケテート・ベケスクサバイ、BGSC・ブタペスト、ポスタス・ブタペスト、ETO・ギョエリ、ベーレース・メテオル・ブタペストしある。

これを見ても男女両チームとも国内リーグ入りしている一流クラブが多いことが眼につく。

ユーゴスラビアで 第10回国際 シンポジューム

アドリア海に臨むトロジールでIHFの後援によるハンドボールコーチのための第10回国際シンポジュームが7月14日から23日までの10日間行なわれた。

16ケ国から、１７６人の多数の参加者を迎えた。

参加者の内訳はオーストリアから4人、ベルギーから8人、ソ連から5人、オランダから9人、クウェイトから4人、レバノンから2人、西ドイツから5人、ポーランドから3人、ポルトガルから6人、ルーマニアから2人、シリアから1人、チェコスロバキアから4人スイスから34人、エジプトから4人、チェニジアから3人、ユーゴースラビアから82人であった。

内容は7人制ハンドボールについてであり、発表と討論が行なわれた。主な発表者はベードリッヒ・ケーニッヒ（チェコ）、クドリマイ・イオシフ教授、シルブ・ディミトール教授（どちらもルーマニア）、ジェルジィ・ティル（ポーランド）、ビリム・テイシク、ブラド・ステンツェル（どちらもユーゴースラビア）であった。

これによって、10回の回を過ぎて、27ケ国、１４５２人のコーチが受講し、討論をしたことになった。

これを記念して、トロジール杯とトロジール選手権が行なわれ、前者はO・B・ユーゴースラビアがアミシティア・スイスを6―3で敗り、後者では、RK・スプリットがRS・ユーゴースラビアを6―5で破り、それぞれ優勝を飾った。

このシンポジュームの参加者は船で楽しい日を送った。

別れる時に参加者は口々に「また来年あおう」と云って、別れていった。

ソ連が優勝！ ―タスマジャン杯―

伝統もできあがったタスマジャン杯は第4回世界女子選手権の前哨戦をかねていたので、従来になく多くの国々からの参加が見られた。7月に行なわれているので、世界選手権は挙行の予定であったので、ソ連、ユーゴースラビアA・B2チーム、東ドイツ、ルーマニア、ハンガリー、チェコスロバキア、デンマークの七ケ国八チームが参加した。

大会は4つづつ二グループにわけての準決勝リーグ、そのあと5～8位リーグと決勝リーグという形で行なわれた。

Aグループ

ソ連	17―14	ハンガリー
ルーマニア	9―7	ユーゴーB
ハンガリー	13―11	ユーゴーB
ルーマニア	12―8	ハンガリー
ソ連	9（4―4 5―3）7	ルーマニア
ソ連	12―7	ユーゴーB

（決勝リーグに適用）

①ソ連3勝、②ルーマニア2勝1敗（以上決勝リーグへ）、③ハンガリー1勝2敗、④ユーゴースラビアB3敗

ソ連が圧倒的な力でこのリーグを全勝した。ルーマニアはソ連の試合に敗れ、やや力が落ちていることを感じさせた。ハンガリーはチャンピオンチームの面目を保てなかった。

Bグループ

チェコ	7―7（分）	東ドイツ
ユーゴーA	10―7	デンマーク
東ドイツ	12―9	デンマーク
ユーゴーA	15―8	チェコ
チェコ	11―5	デンマーク
ユーゴーA	11（6―5 5―6）11	東ドイツ

（分、決勝リーグに適用）

①ユーゴースラビアA2勝1分 ②東ドイツ1勝2分（以上決勝リーグへ）、③チェコ1勝1敗1分、④デンマーク3敗

現在の女子球界のトップレベルの3チームの激突となった。わずかにチェコを前半の有利さをそのまま保って破ったユーゴーAがトップで決勝リーグに、ユーゴーA、チェコと引き分けた東ドイツがこれに続いた。

5―8位リーグ

ハンガリー	7―6	チェコ
デンマーク	13―10	ユーゴーB
ハンガリー	13―9	デンマーク
チェコ	10―7	ユーゴーB

ハンガリー――ユーゴーB、チェコ――デンマークの2試合は準決勝リーグの成績を適用

五位、ハンガリー、六位チェコスロバキア、七位デンマーク、八位ユーゴースラビアB

ユーゴースラビアBが八位になったとは云え、大健斗をした。このチームは平均年令十七・五才というのだから将来恐るべき存在と云えよう。

決勝リーグ

ソ連	13（7―3 6―8）11	東ドイツ
ユーゴーA	9（7―4 2―4）8	ルーマニア
東ドイツ	13（8―5 5―4）9	ルーマニア
ソ連	13（8―6 5―7）13	ユーゴーA

順位　一位ソビエト連邦2勝1分 二位ユーゴースラビアA1勝2分 三位東ドイツ1勝1敗1分、四位ルーマニア3敗

現在の女子球界のトップレベルはソ連、東ドイツ、ユーゴーという定評であったが、まさにそれが裏づけられた。その他の諸国はやや力がおちるのが実情である。

ユーゴー強し A・Bで一、二位 ―ザグレブ杯―

男子ザグレブ杯も5ケ国から6チームが集り、ユーゴーがAB両チームとも4勝1敗となり、得失点差で7点勝るAチームが優勝した。

ユーゴーA	26―13	ハンガリー
ルーマニア	19―13	ソ連
ルーマニア	24―20	ポーランド
ユーゴーB	23―10	ポーランド
ユーゴーA	21―14	ソ連
ユーゴーB	22―19	ハンガリー
ポーランド	22―17	ソ連
ハンガリー	19―17	ルーマニア
ユーゴーB	16―14	ユーゴーA
ユーゴーB	16―14	ソ連
ハンガリー	13―13（分）	ポーランド
ユーゴーA	28―24	ポーランド
ソ連	18―14	ハンガリー
ルーマニア	15―14	ユーゴーB
ユーゴーA	19―15	ルーマニア

①ユーゴーA、②ユーゴーB（ともに4勝1敗、③ルーマニア3勝2敗、④ポーランド1勝3敗1分、④ハンガリー1勝3敗1分（得失点差、⑥ソ連1勝4敗

ユーゴーA・B両チームが強さを発揮して優勝した。

フランスの技術研究(15)

相手の出方に対応する変化を

訳・藤本　強
（日本協会常務理事）

前回に引きつづき、今回も攻撃フォーメーションの実際例をいくつか図示しながら紹介していく。

再三、強調しているように、これらはあくまでも例であって、これをそのまま使用できるチームはほとんどないといっていいほどである。

各チームの特色にあわせて、それぞれ変化させることがハンドボールにおいては肝心である。

先日、来日したルーマニアのコーチ、ネデフ氏も強調していたように、ハンドボールにおいては、そのチーム、その個人個人にあったフォーメーションを作り出すのが一番である。ここで示すのは、オーソドックスにどのような方法が考えられるかということであり各チームのフォーメーションのヒントといった性格のものと理解してもらえば良い。

例1（1図参照）

左サイドに4人を置く準備段階からの攻撃

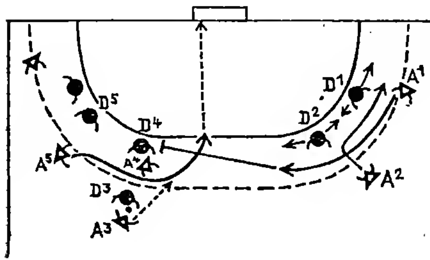
右サイドのA1は左に向って、スタートをきる。これと同時にA2は左にスタートをきって、右サイドのディフェンスD1とD2をひきつけておく。それぞれにフェイントをかけてからスタートするのは云うまでもない。A4はD4をひきつけておく。A1のスタートを見て、A5は一度フェイントをかけてから右に動く。A1がD4をブロックした瞬間にA5はノーマークになり、A3からのボールで得点する。A3、A4はカバーに入れるように次のスタートを考える。

例2（2図参照）

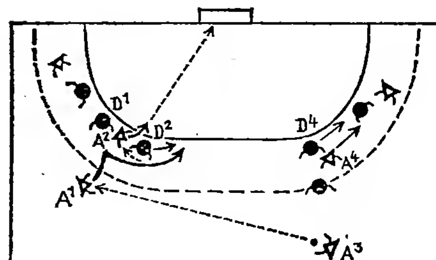
4人の選手をエリアラインに入れた準備段階の場合

A3がボールを持ち、A2がD1とD2の間に入り、準備はととのう。この時、A3とA1は逆サイドにあることが条件である。

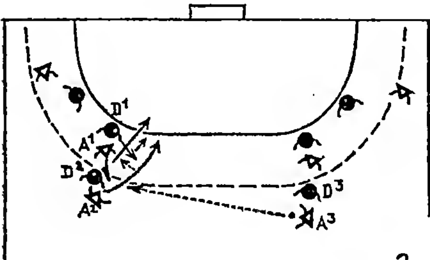
A1はA3からボールを受けるとすぐにD1をめがけて走り、すぐに斜に中央に向って走る。D



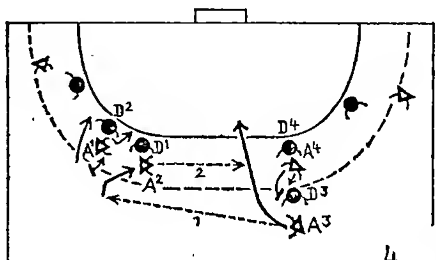
1



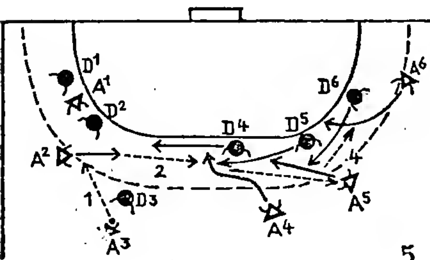
2



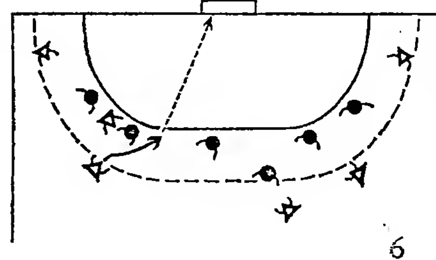
3



4



5


6

2はA1のこの動きによって、動かざるを得ない。結果的にA2はフリーとなる。

A2は向きをかえ、A3からのバックパスを受け、倒れこみシュートを行なう。この時右サイドと左サイドの選手はそれぞれのマークを自分にひきつけておく。またA4は必ず右サイドに向って走りA1、A2へマークが向かわないようにする。もし、A2があかないならば、必ずどこかの位置がノーマークになっている筈である。

例3（第3図、第4図参照）

2・4ディフェンスに対するフォーメーション

3図、4図は一つのフォーメーションのバリエーションとしてとらえることが必要である。ハンドボールのフォーメーションはこのようにバリエーションのあることが、またバリエーションを時に応じて使いわけることがもっとも大切なことである。一つの攻撃がマークされたならば次の手がうてることこれが大きな特長である。そのようにフォーメーションを理解しなければならないし、そのように組まなければならない。

A1はD2をブロックに入り、A2は左にフェイントをかけ、ついで右に進み、A3からパスをもらう。これが基本になる。これが失敗した場合には、次のような変化をすることができる。

第1の場合

A1をマークしていたD1がA2に向って、マークにいった場合には、D2はA2をマークするのが役目であるのだから、D2はA2についている。ブロックに入ったA1はすぐにそれをはずして、エリアラインに向って進み、A2からボールを受け、シュートする。

第2の場合

もし、A1がD2のブロックを左側に入れて出来なかった場合には、D1とD2はチェンジをし、バックはくずれない。その時にはA4がD3のブロックに入り、A3に再びパスをかえし、A2がノーマークとなる。

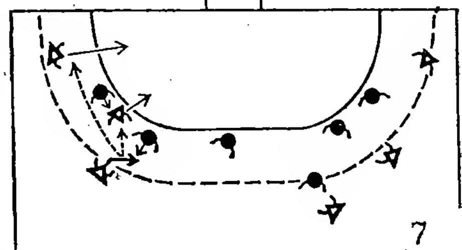
いずれの場合でも、準備段階に十分に左右のサイドにディフェンスを拡げておくことが必要となるのは云うまでもない。

例4（第5図参照）

多くのバックを動かし、得点に結びつけるフォーメーション

基本的にはA1がD1とD2の間に入り、どちらにもマークさせ、バックを引きつけることからこれは始まる。

A3がボールをもち、A2にパスをする。A2はあいている中央に向い動く。D4はつかざるを得ない。A4は左に進路をかえながら走る。これはバックから少しでも遠くということと、最終的なシュートが少しでも中央よりからとの二つの配慮から左による。D5はA4をマーク、同様にA5も左よりに入っていく。D6がマークこの結果、A6がノーマークになるというもっとも単純な形をとっている。もちろん、A2、A3、A4、A5でシュートチャンスがあれば必ず打つ。これが鉄則となるのは云うまでもない。



例5（6図〜9図参照）

3・3の攻撃フォーメーションからのもっとも基本的な戦術

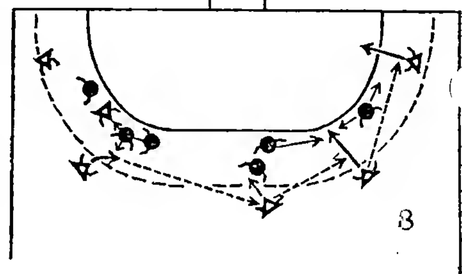
ポストに入った選手は左サイドと次の選手の間に入りこむ。一つの例として、基本的な戦術とディフェンスの対応の基礎を見ていこう。

第1（第6図）

ディフェンスの中央後部のものが位置をほとんどかえていないならば、またボールをアタックにこないならば、ロングないし、ミドルシュートが一発で決る。

第2（第7図）

ディフェンス後部中央の位置が変化なく、ボールアタックに出てくる場合には、パスをポストもしくはサイドに通し、シュートさせる。

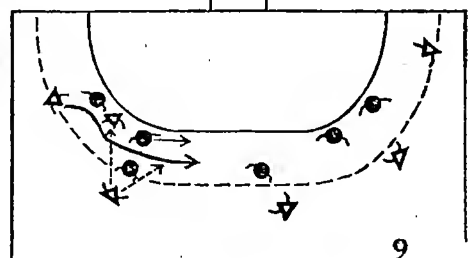


第3（第8図）

ディフェンス中央が左により、ボール保持者に対して、ディフェンスがややアタックに出てくる場合には、すばやいパスを左から右にふり、陣形がととのわないうちに、右サイドで勝負する。このパスがおそいと、ディフェンスは新たな攻撃に対して、陣形をととのえてしまうので、すばやいパスを送らないと攻撃の糸口はなくなってしまう。

第4（第9図）

ディフェンス中央が左サイドにより、ボール所有者に対して完全にアタックに出てくる場合には、右サイドのディフェンスが浮き気味の時には、左サイドは中央に向って、ダッシュをする。これにパスを入れるか、ディフェンスの動きしだいでは、ポストにパスを入れる。どちらかがノーマークになる。



以上のように相手のディフェンスの出方でいく通りにも変化するのがハンドボールのフォーメーションの特長である。しかも多くのバリエーションを常に練習し、相手の出方に対応し、チーム全員がすぐに次の処置に移れるようになっていることが必要である。習慣にまでするのが望ましい。

ハンドボールの歩み（第7回）

ルーマニア連覇

――世界選手権編⑦――

日本初の一勝

第5回世界男子7人制ハンドボール選手権大会の本大会は1964年3月6日から15日までチェコで開かれた。

この大会の申しこみは26ケ国あり、うち8ケ国が予選なしで本大会に出場できることになった。幸い我が国もこの8ケ国の中に入ることができた。予選なしの出場国は、前回の一、二、三位のルーマニア、チェコ、スウェーデン、四位のドイツが東西に別れて本大会から出場するので、東西ドイツ、五位のデンマーク、六位のアイスランドということになり、他の18ケ国は予選を行なうことになった。予選は二回戦方式で行なわれた。ソ連―フィンランド、スイス―ルクセンブルグ、ハンガリー―ポーランド、ユーゴー―オーストリー、ノルウェー―オランダ、フランス―スペイン、米国―カナダ（上に書いたチームが本大会に出場。）アラブ連合―シリアの勝者対セネガル―象牙海岸の勝者（アラブ連合が出場）

本大会は16チーム参加でまず4グループの予選リーグ、このうち上位2チームをとって、2グループ4チームずつによる準決勝リーグ、この1、2、3、4位同士による1、3、5、7位決定戦という形がとられた。

予選リーグA組（ゴットワルドフもしくはウェルスケ・フラドィステ）

西ドイツ 14（8－8 6－6）14 ユーゴー
（決勝リーグに適用）
東ドイツ 20－9 アメリカ
ユーゴー 22－3 アメリカ
西ドイツ 12－10 東ドイツ
東ドイツ 14－14 ユーゴー
西ドイツ 24－13 アメリカ

一位 西ドイツ2勝1分 二位ユーゴー1勝2分 三位 東ドイツ1勝1分1敗、四位 アメリカ3敗

西ドイツ、東ドイツ、ユーゴーの差は全く紙一重、西ドイツ戦でわずかに劣った東ドイツが非運にも、決勝リーグに進出できなかった。東ドイツは第6回大会でも同様についていないことがあった。

予選リーグB組（ブラティスラバ）

スウェーデン 15（8－4 7－4）8 ハンガリー
（決勝リーグに適用）
アイスランド 16－8 アラブ連合
ハンガリー 16－9 アラブ連合
アイスランド 12－10 スウェーデン
ハンガリー 21－12 アイスランド
スウェーデン 26－11 アラブ連合

一位 スウェーデン2勝1敗（得51失31、＋20）、二位ハンガリー2勝1敗（得45失36、＋11）、三位アイスランド2勝1敗（得40失39 ＋1）、四位アラブ連合3敗

2勝1敗同士の三つ巴、アイスランドがスウェーデンを破ったというのは大ニュースであろう。しかし、得失点差でスウェーデン、ハンガリーが準決勝リーグに進出することになった。

予選リーグC組（プラーグ）

チェコ 23－14 フランス
デンマーク 16－13 スイス
スイス 15－14 フランス
チェコ 14（7－7 7－4）11 デンマーク
（準決勝リーグへ適用）
デンマーク 26－13 フランス
チェコ 26－10 スイス

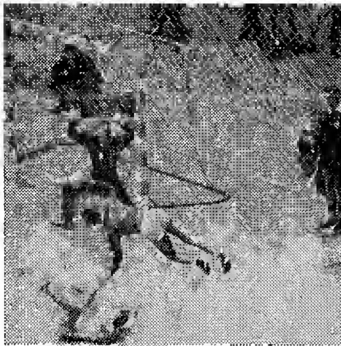
一位 チェコ3勝、二位デンマーク2勝1敗、三位スイス1勝2敗、四位フランス3敗

チェコが強みを発揮し、この組のトップ、デンマークがこれに続いた。スイス・フランスはこれら両チームに比べるとかなり差が見られる。

予選リーグD組（パルドビス）

ルーマニア 16（7－8 9－6）14 ソ連
（準決勝リーグへ適用）
日本 18（9－4 9－10）14 ノルウェー
ルーマニア 18－10 ノルウェー
ソ連 40（23－6 17－4）10 日本
ノルウェー 13－11 ソ連
ルーマニア 36（16－7 20－5）12 日本

一位 ルーマニア3勝、二位



ソ連1勝2敗（得65、失39、＋26）、三位 ノルウェー1勝2敗（得37、失47、－10）、四位 日本1勝2敗（得40、失90－50）

日本は1勝を挙げたものの、ソ連、ルーマニアに大差で負けたため、四位におわった。

ルーマニアは前回のチャンピォンチームらしい堂々たる勝ちぶりであった。ソ連との一戦、前半リードされて、ハッとしたが後半もり返して、事なきを得た。

準決勝リーグI組（プラハ）

ハンガリー 19（12－8、7－7）15 西ドイツ

スウェーデン 23（13－7、10－11）18 ユーゴー

ユーゴー 16（7－8、9－7）15 ハンガリー

西ドイツ 16（8－3、8－5）8 スウェーデン

一位 スウェーデン2勝1敗、二位 西ドイツ1勝1分1敗（得45、失21、＋4）、三位 ユーゴー1勝1敗1分（得48、失52、－4）、四位ハンガリー1勝2敗

実に複雑な星争いとなった。一つにはこのグループには、絶対の力をもつチームがいないことも原因であろう。どっちかといえば、II組に比べると力の劣るチームが集っている感のあるI組である。

準決勝リーグII組（プラハ）

チェコ 18（9－7、9－8）15 ソ連

ルーマニア 25（15－8、10－7）15 デンマーク

ソ連 17（7－4、10－10）14 デンマーク

ルーマニア 16（7－8、9－7）15 チェコ

一位 ルーマニア3勝、二位 チェコ2勝1敗、三位 ソ連1勝2敗、四位デンマーク3敗

ルーマニア、チェコの両優勝候補の激突がこの組の見物、これは事実上の決勝戦以外の何物でもない。前回の優勝はややフロック的に見られていたルーマニアであったが、今回は堂々とチェコとガップリ四つに組んで、主砲モーゼルを押したてて、チェコを圧倒した。もっとも、ルーマニアの勝ちは危い綱渡り的にタイムアップを狙ったフシはあったにしても、堂々たる勝ちで、今回優勝を決めたといっても過言ではあるまい。チェコソ連ともに力はきわめて接近していた。かっての一方の雄デンマークの凋落ぶりが眼をひいたグループ戦であった。

七位決定戦

デンマーク 23（15－8、8－6）14 ハンガリー

デンマークはやっとハンガリーをくだして、7位の座を勝ちとった。

五位決定戦

ソ連 27（14－9、13－9）18 ユーゴー

キーパー、ジマルの活躍で、ソ連は五位の座を獲得した。この試合、ユーゴーのエースザグメスターは徹底的にマークされ、十分な活躍を見せなかった。（その後、ザグメスターは西ドイツのゾーリンゲン98に籍を置き、最近また帰国して、ユーゴの一員として活躍している）。

三位決定戦

チェコ 22（14－8、8－7）15 西ドイツ

チェコの勝利は対戦前から、確定しているようなものであった。前半ややせったが、後半チェコは大量得点をうばい、楽勝した。

一位決定戦

ルーマニア 25（11－9、14－13）22 スウェーデン

戦前の予想では、ルーマニアの楽勝が期待されていたが、スウェーデンの喰い下りで戦はかなりもつれた。前半はルーマニアのペース、スウェーデンが追いつく、また離すといった調子で、ナト、の活躍でスウェーデンをふりきった。モーゼルはこの大会のリーディングゲッターになった。

一位 ルーマニア
二位 スウェーデン
三位 チェコ
四位 西ドイツ
五位 ソ連
六位 ユーゴー
七位 デンマーク
八位 ハンガリー



ルーマニアチーム

ルーマニア優勝メンバー

GK レドル、タ　レ

FP グルイア、モーゼル、フナト、ノデア、コスタケII、オテレア、イバネスク、ヤコブ、ポペスク

昭和43年度の各都道府県別登録チーム数が9月9日現在で日本協会から発表された。

これによると全国の登録チーム数は一四四六になっている。かなりのび方ということが云えるであろう。

一般男子チームは三三三とかなりの数になっている。一般女子は六八と男子に比べると淋しい。

教員男子は三八チームになっている。

高校男子は六一二、同女子は三九五、両者合せると、一〇〇七と一〇〇〇の大台をこえている。関係者の努力の賜である。

一方登録用紙をあたってみると新規チームは非常に多く、三百近い数であったが、それがそのまま増加に結びつかないのは、登録をとりやめたり、あるいは解散してしまったチームがあったりで、差し引きするとこのような結果になってしまうのは、残念なことである。

こういった消えていったチームの中には、高校チームもいくつかは見られるが、もっとも眼につくのは、クラブチームの消長である。

現在、クラブチームの置かれている状況は非常に悪い。

練習時間、財政面ともに四苦八苦の状況であり、それぞれの選手にかなりの熱があっても、なかなかチームとしてまとまっていかないのが実情のようである。

地域を単位としたクラブでほとんどチームが作られているヨーロッパ諸国との大きな違いがここに見られる。

経済上、時間的な問題が解決され、クラブでそれぞれの選手が十二分に活躍できるような、カネとヒマのもてる時代がくることが切望される。

登録チーム数の発表を見て

高校チームが多数を占めているのは、もちろん高体連関係者の努力の賜であることは確かなのだがこれら高校チームの選手だった人々がそのまま、ゲームを離れてしまうことは誠に残念なことである。

各チーム内輪にみても、毎年5人の選手はあることだろうから、一千チームで、毎年五千人のプレーを自分自身でした人々が社会に送り出されている訳である。

その人達で続けてプレーしているのはごく少数でしかない。底辺の普及という点で誠にもったいないことである。一〇年たてば五萬人の人が送り出されることになるではないか。これらの人とハンドボールとの関係がプッツリというのでは、余りにもったいない。なんとか関係をつなぐような工夫をしなくてはなるまい。カネとヒマなどといってはいられない。

すでに本誌にも、田中滋章氏がよせられたようなチーム作りが、各地で具体的に進められるべきであろう。

各地のチーム作りの苦心談、あるいはこのようにしてチームを作ったというような話を本誌にどんどんよせて欲しいと考える。

こういった点で本誌がいささかでも読者のお役にたてばと思っている。

それとともに、女子球界、教員界のより一層の拡充も望みたい。

一般男子球界のチーム数の増加はいちぢるしいものがあるので、より一層その感を強くする。

社会の情勢、ハンドボール界の情勢等、チームが増加しにくい情況はあろうか、年々送り出されている選手がそのままになってしまうはいかにも残念である。

普及のトップを行く教員界については、自らも選手であることは多いに普及という面でも役だつであろう。

企画委で検討中の教育系大学戦が実現され、年々拡充され、教員チームが編成されていない選手層をなんらかの形で参加できるような形にもっていってもらいたいものである。

女子球界では、中四国・九州にチームが少ないことはいかにも残念である。中四国、九州地区といえば、高校チームに優秀チームが多いことはすでに知られているところである。

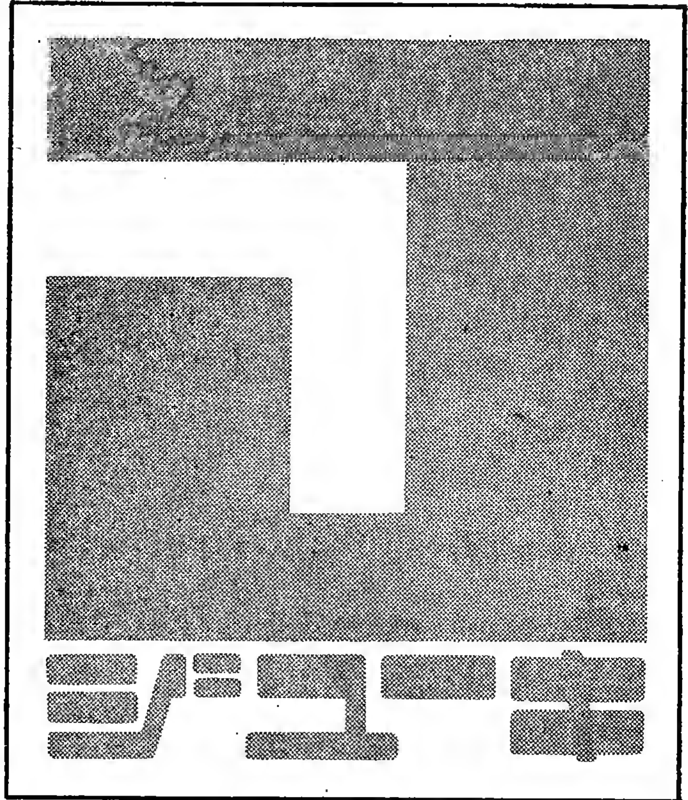
これらの選手の多くの活躍できる場がないということはいかにも残念なことである。

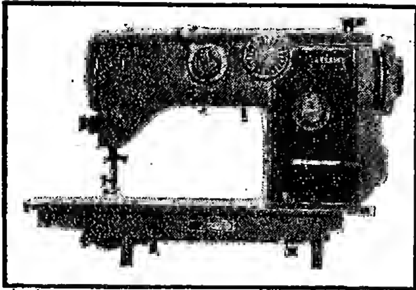
いろいろ困難な状況はあろうがなんとかチームを編成し、より多く人間がより多くの期間、ハンドボール選手として活躍できるようになってほしい。

底辺が拡大すること、競技人口が増えることは、日本リーグあるいは各種大会の支持層をも増すことになり、安定した大会運営を可能にすることになり、ハンドボール界の一つの県案事項を解決する道にもつながってこよう。

底辺の拡大・トップレベルの向上、これは車の両輪のように、相ともなって進む性格のものであるので、各チームの経験、その他チーム作りの具体策などをどしどし投書して、各チームの体験を全国で生かせるようにしてほしいと考える。読書諸兄の積極的な投書を待ちます。(TS・F)

ミシンはマークで
お選び下さい





*HZD－956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社

本社工場　東京都調布市国領町８丁目２番地ノ１電話（480）1111番（大代表）

〝全日本大会〟へ読者の意見

前号の問題点シリーズで〝全日本大会の再検討〟を報じたところ読者のかたがたから19通の投稿が寄せられた。
いずれもユニークな意見ばかりだが、編集部ではこのうちの九つ意見を御紹介することにした。

シーズン制確立が急務

全日本各大会の再検討が進められているそうだが、急務はむしろ〝シーズン制の確立〟にある。七人制一本化によって、年中のべつまくなしに大きな大会がありどこがピークなのか判らない。

外国チームの来日がひんぱんになるようだとますますこの傾向は強まるだろう。

私の考えとしては①4月から11月、②9月から1月の二つだと思う。

②にプラス8月のインター・ハイ、全日本教職員というのがよいのではなかろうか。

そうなれば必然的に全日本は総合と選抜のうち総合が残されよう

1月中旬に全日本選手権を開くのが理想的である。

（愛知　小池重治）

室内は日本リーグだけに

スポーツはやはり青空の下でやるべきであり、いかに七人制一本化とはいえ、日本のハンドボールシーズンは8月を頂点に編成されるべきだ。それ故に小生は現行の全日本選手権の配置にまったく異議はなく、手なおしの結果は「改悪」になると思う。

しかし、ハンドボールの一般へのPRは欠くことの出来ぬものであり、そのためには日本リーグを11～12月に行ったらどうか。

男子の場合、実力のある学生勢の参加が問題だが、秋のリーグの結果によって関東2、関西1、地方1の4大学によってまず日本学生選抜リーグを行い上位2校を決め、一方実業団（全日本実業団選手権優勝者）、教員（全日本教職員選手権優勝チーム）、一般（国体一般男子優勝又は2位チーム）の3者によるリーグを行い1位を決め学生2者を加えての日本リーグを行うのだ。

学生側を東日本で、社会人側を西日本で行い隔年ごとにその開催地を変え、日本リーグは東京に固定したらよい。

女子は現行の日本協会推せん制が無難だが、準決勝リーグの会場は男子同よう二地区に分け、決勝リーグ（日本リーグ）を東京に固定したらどうか。（東京・鵜飼誠）

全日本総合二段階案

全日本総合の試合方法に提案。

まず全国を北部、東部、中部、西

部の4ゾーンに分け、現行のブロックを配分し、それぞれでトーナメントを行う。これを全日本総合第1次大会と呼ぶ。

つづいて各勝者によりリーグを行う。これを決勝大会と呼ぶ。

第1次大会は各ゾーンとも32チームのトーナメントを原則とする。

したがって全参加数はフルエントリーなら一二八チームとなる。決勝大会はその多数のなかから精選された4者というわけである。

第1次大会は8月に各地で一斉に行い、決勝大会は9月に東京、大阪、名古屋で各年持ち廻ってはいかが。

女子は全日本女子選手権と称して現行方法（自由参加）を残し、国体開催の前年にその地で8月に開く。

未定ながら空白が予想される11月に全日本学生、12月に全日本実業団を開いてはどうか（大阪・KK生）

16チームによる全日本を

全日本総合の32チーム（男子）は多すぎると思う。16チームでよい。

それを4チームづつ4組に分けた予選リーグ、ベストフオアによる決勝トーナメントは、2試合システムで行ったらよい。

予選リーグに3日、決勝トーナメントに4日計1週間を必要とするが、チャンピオンチームを選ぶにはこのくらいのことが必要だ。

会期は11月又は12月。出場チームは全国9ブロック代表、学生推せん3、実業団推せん2、教員推せん1、前年度優勝チームの16とする。開催地は前号の6大都市輪番説に賛成。（横浜・S・S生）

チャンピオンシリーズを

全日本総合も全日本選抜も廃会してしまい、全日本学生、全日本実業団、全日本教員各大会の上位チームによる「チャンピオンシリーズ」の新設を望む。

出場チームは男子は学生5、実業団2、教員1、女子は実業団5学生2、高校1。

8チームを4者づつ2組に分け準決勝リーグ、各組上位2者による決勝リーグを行う。

これだと一般社会人チームの代表がもれるが国体でがまんしてもらうことにする。そのかわり、男女とも国体には実業団の単独出場を禁じるのだ。（東京・三木治郎）

国体に女子実業団は遠慮を

機関誌によりますと、一般女子のクラブチームは年々減る一方とありますが、これはむしろあたりまえのことです。

実業団の条件のよさに比べて、OGのクラブは好きだからやっているというだけで、あまりにもその差は大きく、試合で勝つことなどとうていムリです。

勝負は二の次と割り切るのは難しいことで、どうせ勝てないのなら、消極的になり、やがては活動休止というコースをたどるのです。

日本協会が、これまでにOGクラブの活路に手をさしのべたということを聞きませんが、せめて国体だけでも単独実業団の出場をストップさせ、OGクラブに開放するよう研究をしてみて下さいませんか。

全日本の再検討というテーマなかのこれは一つになると思うのですが。（愛知・匿名希望＝女性）

忘れるな地方への普及

オリンピック出場という大目標がある以上頂点の強化に球界が全力をあげるのは結構で、当然なことでもあるが、やはり地方での普及ということを忘れてはならない。

全日本選手権を大都市で集中的に開くという案も一理はあるが、地方の選手やファンはいかにしたらそれではよい試合を見れるのかといった点を充分留意して欲しい。

いままでのような高額な負担金では弱小地方協会ではとうてい国際試合など主管はできない。

今春、東京で日本協会30周年記念試合を開いたそうだが、東京で1回のみということではなく、高レベルの試合を地方に持ち廻ってくれてもよかつたように思う。

企画委員会もプランニングばかりではなく、どの位のスケールの大会（あるいは試合）なら開催を引きうけられるか全地方協会にアンケートすることも必要だと思う。

地方で見聞する範囲では、全日本大会の再検討よりも以前に考えて欲しい基本課題の方が多いような気がする。（長野・一OB）

全日本選抜の解消を

現行の全国大会のうち、いちばん性格があいまいなのは〝全日本選抜〟である。

選考基準が不明確なことがそれに拍車をかけているわけだが、各大会を同等に扱ってその上位チームをピックアップするという基本方針も必しも当を得たものではあるまい。

その選抜方法がシーズン前（年度はじめ）に知らされているのならともかく、そうした配慮もされていないのではないか。

この大会を解消して全日本総合を12月に開くのが現状では最良の日程だと思う（京都・武田泰男）

〝教員〟の重視は疑問

日本のハンドボール界のなかで教員チームの占める割合が大きいことはいちおう認められるものの学生、実業団と同じ扱いをしすぎるような気がしてならない。

特に年末の全日本選抜の選考にかなり教員界のウエイトが大きいのはどんなものか。

たしかに秀れた選手はいるが、チームとしてはやはり総合力に欠ける。

教員の使命は、自らがプレーし栄光を得るよりも、底辺の拡充、競技の健全な普及といった面が第一義なハズだ。

去年の全日本選抜を見て、この大会があまり盛りあがらないのは、教員チームのまた国体（一般男子）の重視にあると感じた。

男子の場合、学生界4、実業団2、教員・クラブ2の計8チームとすれば充実すると思う。

そうなれば全日本選抜無用論はおきてくるまい。（東京・中村修）

安藤純光氏が渡欧

安藤純光審判部長（日本協会常務理事・学連理事長）は、ヨーロッパの体育研究のためこのほど渡欧した。帰国は来年4月の予定。

なお、安藤氏が渡欧中の審判部は、山田計氏（日本協会常務理事）が部長代行、佐野和夫氏（都協会理事長）が事務を担当する。

日本ハンドボール協会組織・加盟団体所在地一らん表

（昭43．9．1現在）

	会長名	理事長名	協会（事務所）所在地
本部	保坂　周助（代行）	荒川　清美	東京都渋谷区神南町25　岸記念会体育会館内
北海道	徳中　康満	岡田　豊夫	北海道幌別郡登別町字来馬169　登別高校内
青森	鹿内　一胤	田村　侃三	青森市合浦町２—９—15　青森商業高校内
秋田	武田　兼治	由利　弘	湯沢市新町　湯沢高校内
岩手	菊池慶一郎	佐藤　敦	盛岡市本町通３—16—１　岩手医大教養部体育研究室内
山形	市村利兵衛	保坂　浩	東根市大字東根丁１７７　東根高校内
宮城	松川　金士	福島　富造	仙台市川内　東北大教養部体育研究室内
福島		熊田　栄一	郡山市方八町２—６—９　熊田栄一方
群馬	保坂　梅雄	町田　歳雄	富岡市七日市1500　富岡高校内
栃木	長竹　寅治	渡辺　繁	足利市本城１—1629　足利高校内
茨城	染谷秋之助	入江　暢一	水戸市渡里町　茨城大学体育研究室内
埼玉	藤間　英一	井田万三郎	浦和市元町１—28—17　浦和市立高校内
千葉	安田　敬一	角田　節	佐原市佐原1861　佐原女高内
東京	渡辺　和美	佐野　和男	品川区五反田２—２—７　（株）大崎電気工業内
神奈川	保坂　周助	若崎　重富	横浜市南区三春台４　関東学院高等部内
山梨		清水　正	山梨県東八代郡石和町　山梨園芸高校内
新潟	近藤　禄郎	渡辺五郎兵衛	柏崎市東本町２丁目　近藤禄郎方
長野	鈴木　俊	油井孝一郎	小諸市田町　小諸商業高校内
富山	高田　義一	島田　重春	富山市新総曲輪２番32号　富山県経済農業連合会
石川	油谷　外郷	若山　博	金沢市丸の内３—３　石川県体育協会内
福井	伊藤　仁和	中村九郎右衛門	福井市坂垣町29　羽水高校内
静岡	斎藤　敏之	片瀬喜代治	清水市青葉町１　清水市立商業内
愛知	小杉　仁造	栗脇　凝	愛知県知多郡横須賀町高横須賀　県立横須賀高校内
岐阜	山内　晴次	高井　勝勇	岐阜市加納三笠町２—19　（株）常盤工業内
三重	田村　正衛	中根　武彦	津市柳山興　津実業高校内
滋賀	白崎　重幸	尾本　和男	彦根市金亀町　彦根東高校内
京都	木下弥三郎	入江　平三	京都市左京区嵯峨広沢南野町19—11　小西博喜方
大阪	野原　博彦	山田　計	大阪市住吉区帝塚山西４—55　市立住吉中学校内
兵庫	滝川　慶作	増岡　茂義	神戸市須磨宝田町２丁目１　滝川高校内
和歌山	中村　常夫	岩西　宏純	和歌山市豊原町１—１　桐蔭高校内
奈良	堀内　俊夫	森田　正英	奈良市高樋町４の８　森田正英方
岡山	村山　寛	辻　一義	岡山県真庭郡落合町垂水　落合高校内
広島	川上　正幸	伊藤　茂男	広島市若草町駅北口　（株）いとう屋内
山口	近間　忠一	藤田　信義	山口市糸米　山口高校内
島根	青山　善平	高尾　茂	松江市乃木福富町　島根農科大附高校内
鳥取	安田　光昭	高木　敏行	境港市上道町821　境港高校内
香川	森　住雄	辻　要	高松市四番町８　高松工芸高校内
徳島	久木　武夫	田岡　忠	徳島市田宮町西野799　城北高校内
愛媛	梶浦　暲一	越智　武	松山市石手509—2　越智武方
高知	邑田　一郎	川崎　秀雄	高知市追手筋７　追手前高校内
福岡	岡野　正美	中西　敬一	福岡市香椎町　香椎高校内
佐賀	古賀甚一郎	甲斐　忠義	佐賀市北川副町木原　佐賀東高校内
長崎	桑原　信市	松村　守	長崎市文教町　長崎大学教育学部内
大分	中尾　節次	疋田　忠	大分県東国東郡国東町田深　国東高校内
宮崎	野瀬　良胤	池之上明造	都城市妻ケ丘町27—15　都城泉ケ丘高校内
熊本	佐々木克己	藤田　八郎	熊本市黒髪町坪井242　済々黌高校内
鹿児島	増田　静	鮫島　昇	鹿児島市小川町３—56　県庁内国体事務局連務調整課気付
沖縄	仲田　豊順	平仲　孝栄	沖縄・沖縄郡那覇市字真地248　真和志高校内
（加盟団体）			
高体連ハンドボール部	児玉　九十	徳永　陸繁 山田　計 小袋　是郎	東京都世田谷区成城町1100　世田谷工業高校内
全日本学連	西　敏郎	安藤　純光	東京都渋谷区神南町25　岸記念体育会館内
全日本実連	古賀和佐雄	浜田猪三郎	東京都品川区五反田２—２—７　（株）大崎電気工業内

（注）　高体連役員のうち児玉氏は部長、徳永、山田、小袋の３氏は副部長

306420

関東学生"記念"を飾れず

対実業団　関東学連30周年試合

関東学生連盟の創立30周年記念試合は、9月23日午後2時から東京・駒沢屋内球技場に二千近い観衆を集めて開かれた。

記念試合は記念式（西会長の挨拶など）に引きつづき男女の関東実業団選抜—関東学生選抜の2試合が行われ、いずれも巧みな試合運びを見せた招待チームの実業団選抜が一本調子の学生選抜を降した。

▽男子

関東実業団選抜　16（7—6, 9—9）15　関東学生選抜

得	【実業団選抜】		【学生選抜】	得
0	福本（大崎電気）	GK	本田（日体大）	0
		GK	金（法政）	0
1	井上（大崎電気）	FP	野田（立教）	0
0	江名（三景）	FP	東（立教）	9
1	近藤（大崎電気）	FP	早川（日体大）	0
3	尾形（三景）	FP	高橋（日体大）	1
2	飯田（大崎電気）	FP	平岡（東教大）	1
4	近森（大崎電気）	FP	藤中（日体大）	1
3	竹野（大崎電気）	FP	石井（法政）	3
0	青木（千代田印）	FP	古村（慶応）	0
1	竹村（三景）	FP	藤井（明治）	0
1	榊（三景）	FP	秦（芝工大）	0
16	（0）	7MT	（3）	15

（主審　佐野）

▼交代【実業団】▽FP　片山（大崎電気）、旗野（同）、近藤（千代田印刷機製造）【学生】▽FP　村上（芝浦工大）、喜田（中央）

○……学生のスタートはよかった。主役は東（立教）。いきなり一人で4点を連取し7分4—0とした。

出ばなを叩かれた実業団は激しいあたりを見せる学生のディフェンスを切り崩せず11分近森（大崎電気）がやっと1点目。18分2—6とはなされてそのままのペースで進むかにみえたのだが、そのあとどうしたことか学生の突進がぱたりと止まってしまった。

○……こうなると実業団はベテラン揃いだ。24、26分竹野（大崎電気）の連続ゴールを口火に次第に追いあげ27分尾形（三景）のゲットで6—6の同点。28分30秒飯田（大崎電気）のミドルシュートで逆転し完全に試合の主導権を握ってしまった。相手の乱調に乗じて劣勢から一気に優位へと立ち場を変えてしまう実業団各選手の老巧さはみごとだが、この間の学生勢の無策は情ない。

○……後半も実業団ががっちりペースを守って先行、特に10分と12分の2回、相手のスキをつくシュートを決めた左腕・尾形の巧技は鮮やかで17分には12—8とリードした。

学生は前半18分以後無得点がつづき8分ようやく東がゴール、そのあと反撃の気勢を示して再び試合を活気づかしたのだが、要所をGK福本（大崎電気）におさえられたり、ボンヘッドをおかして1点差で逃げ切られてしまった。

○……実業団は、国体を前にして主力選手が好調、一方の学生はリーグ戦一ケ月前。"条件の差"もあるにはあったが、それにしても学生勢の敗退はいただけない。

実業団は混成とも思えぬコンビネーションをみせたが、これはゴール前の巧みな配球によるものだ。

学生のパスは、むやみに力が入りすぎていた。単一チームならそれも通るだろうが、混成では、よほど呼吸が合わぬ限りつながるわけはない。特にリードを許したあとは焦りもあってこの失敗がつづいた。ハンドボールセンスの差が勝負を色分けたといってよいだろう。

○……わずかに後半11分野田（立教）—藤中（日体大）の連けいプレーが『30年の伝統を誇る関東学生界』にふさわしいもので、あとはOB連中の巧技ばかりが目につき、男女とも苦々しい"御祝儀"をプレゼントされるハメになってしまった。

実業団スピードで圧倒

▽女子

関東実業団選抜　16（7—3, 9—3）6　関東学生選抜

得	【実業団選抜】		【学生選抜】	得
0	高野（東京重機）	GK	小野里（日体大）	0
0	吉田（三菱鉛筆）	GK	太田（日女体大）	0
2	早川（大崎電気）	FP	川口（日体大）	2
4	鈴木（大崎電気）	FP	原（日体大）	1
3	加藤（大崎電気）	FP	沢谷（日体大）	0
3	蓮見（三菱鉛筆）	FP	姫野（東女体大）	1
1	落合（三菱鉛筆）	FP	石井（日体大）	2
0	島田（東京重機）	FP	津熊（日体大）	0
0	江川（三菱鉛筆）	FP	熊谷（東女体大）	0
0	三井田（三菱鉛筆）	FP	古川（日体大）	0
0	小幡（大崎電気）	FP	浅見（東女体大）	0
1	山本（東京重機）	FP	高橋（東女体大）	0
16	（0）	7MT	（2）	6

（主審　岡前）

▼交代【実業団】▽FP　鈴木（三菱鉛筆）得1佐々木洋（同）得1栗林（大崎電気）【学生】▽FP　中村（日体大）

○……レベルアップしているとはいえ学生勢にとって、モスクワ（世界選手権）行きの決まっていた早川（大崎電気）ら4人を主力とした実業団が相手ではどうにもブが悪い。

しかしスタートは互角、むしろ押し気味だったのだが、肝心のシュートが安定せず先行できなかったのは惜しい。

○……実業団は6分鈴木（大崎電気）が独走して先取点、つづいて蓮見、早川、加藤と得点を重ねたが、学生は石井の7MTによる1点のみで15分を経過、その後もシュート数では学生側は勝りながら、決定力がないままに、実業団の確実なシュートの前に点差を拡げられた。学生陣は20分をすぎてからやっと、川口が2点をあげ、後半に興味をつないだ。

○……後半は総合力の差がはっきり出てしまい、時間の経過とともに点差も開いていった。

後半になると学生は前半には決定はしなかったが、とにかくうてたシュートがぜんぜんへつてしまい、しかも5分から23分まで無得点という状態が続いた。これに反し、実業団は後半14本のシュートのうち9本を決めるというシュートの確実さ。

やはり両者の決定的な差はスピードである。攻守の展開の速度がまるで違うのだ。脚力、シュート力はもちろん、キャッチからパスへの動作にまで差がある。

例えば、せっかくボールを得て逆襲に転じても、帰陣の早い実業団選手に廻りこまれてつぶされてしまう。

こうしたことのどれかひとつ改められても、スコアはかなり縮めることができると思う。学生勢のいっそうの精進を望みたい。

（杉山）

各地の記録

寄稿歓迎

高校で石岡勢が勝つ

▼第4回茨城県民総体ハンドボール（9月・茨城大）

▽一般男子市対抗準決勝
勝田市 17―12 土浦市
竜ケ崎市 18―15 水戸市

▽同決勝
勝田市 23（11―8 12―11）19 竜ケ崎市

▽同町村対抗1回戦（1試合）
東海村 21―13 小川町

▽同決勝
東海村 30（17―6 13―4）10 内原町

▽高校男子準々決勝
麻生 12―7 土浦三
土浦工 14―13 笠間
石岡一 18―6 下館一
竜ケ崎一 11―3 土浦一

▽同準決勝
土浦工 11―7 麻生
石岡一 8―4 竜ケ崎一

▽同決勝
石岡一 21（11―2 10―4）6 土浦工

▽同女子準々決勝
笠間 9―4 磯原
石岡二 11―9 鉾田二
八郷 12―4 麻生
水海道二 14―4 常北

▽同準決勝
石岡二 16―5 笠間
水海道二 5（分）5 八郷
抽せんにより水海道二の勝ち

▽同決勝
石岡二 9（5―4 4―3）7 水海道二

▽市対抗中学校男子決勝
結城 18―17 駒王

▽同女子決勝
結城 11―8 水海西

▽町村対抗中学男子決勝
千代田 23―22 桜丘

▽同女子決勝リーグ順位①新治②桜丘③神栖

高校ク勢強し

第二回静岡県西部ハンドボール選手権9月8日・於二俣高

▽一般男子リーグ
浜松南高ク 22―10 西部陸上教員ク
天竜林業ク 23―20 二俣高ク
二俣高ク 20―18 自衛隊浜松北
浜松南高ク 22―13 気賀高ク
自衛隊浜松北 13―10 二俣高ク
天竜林業ク 20―17 気賀高ク
浜松南高ク 25―11 天竜林業ク

①浜松南高ク、②天竜林業ク、③気賀高ク、④二俣高ク、⑤西部陸上教員ク
自衛隊浜松北は特別参加のため順位なし

▽一般女子準決勝
二俣高ク 15―8 浜松南高

▽同決勝
二俣高ク 14―9 浜南クラブ

第21回滋賀県民体育大会結果

（滋賀のスポーツによる）

▽中学男子決勝
彦根南 13―6 守山

▽中学女子（リーグ戦）
秦荘中3勝で優勝

▽高校男子決勝戦
八幡工 10―9 彦根東

▽高校女子（リーグ戦）
八幡高 3勝1分で優勝

▽一般男子決勝戦
野洲 10―9 高島

▽一般女子決勝戦
愛知 6―5 近江八幡

吉見（男）・柱島（女）勝つ

―第21回山口県中学校体育大会

10月10・11日

男子18校、女子5校が集り、開かれた。

▽男子準々決勝
吉見 14―10 柱野
河内 15―7 小野田
北河内 17―6 萩一中
通津 11―9 文洋

▽男子準決勝
北河内 9―6 通津
吉見 17―6 河内

▽男子決勝
吉見 14―5 北河内

▽女子準々決勝（＝一回戦）
天尾 16―4 大内
（一試合のみ）

▽女子準々決勝
天尾 15―6 住吉
柱島 25―3 鴻南

▽女子決勝
柱島 15―5 天尾

編集部からのお願い

本誌では、日本ハンドボール界の健全な発展のために、読者各位からの積極的な寄稿を歓迎いたします。技術リポート、研究論文をはじめどしどしご意見を編集部までお寄せ下さい。
〆切日は特に設けません。

▽研究論文　五千字ないし一万字、原稿用紙使用のこと。図・写真を入れて下さって結構です。ただし未発表のものに限ります。

▽技術リポート　五千字内外、原稿用紙使用のこと。ただし未発表のものに限ります。
以上は原稿末尾に住所、氏名、勤務先を明記してください。

▽各地の記録　用紙自由、大会名、大会日会場を明記して下さい。原稿末尾に、大会主管団体名を必ず記入をお願いいします。各地の記録用に写真も入れていただいて結構です。

▽地方協会告知板　用紙自由

▽表紙写真　特に、題材は限りませんが、なるべく、多くの読者に興味ある題材を選んでいただきたいと思います。キャビネ版以上、裏面に日時、場所、対戦チーム、大会名（できればデータも）を明記して下さい。

● 原稿のあて先は　東京都渋谷区神南町25　日本ハンドボール協会編集部

●● いったん提出された原稿写真はお返しいたしません。
原稿は編集の都合上、原文を短かくする場合がありますが、御了承下さい。写真も掲載しかねる場合もあります。

編集後記

▽今月号は国体を中心にした編集にしました。表紙写真には、兵庫の光島磯雄氏が望遠レンズを駆使した非常にシャープな写真をよせて下さいました。大変感謝しております。

また福井新聞社にも無理をお願いして、写真を出していただきました。感謝いたします。

どしどし、写真をお送り下さい。紙面の許す限り掲載していきたいと思います。

これがお手許に届くころには、メキシコの聖火も消えていることでしょう。

いよいよミュンヘンです。この聖火の下、プレーできるように、全員で努力していきたいと思っています。

（TF）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第五十九号
昭和四十年六月七日　第三種郵便物認可
昭和四十三年十月二十五日印刷
昭和四十三年十一月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東京（渋谷区神南町二五）
電話　大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価百五十円
（年間購読11回・千二百円）